

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成28年度研究開発実施報告書

「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」

研究開発領域

「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」

倉原宗孝
(岩手県立大学総合政策学部、教授)

目次

1. 研究開発プロジェクト名（公開）	2
2. 研究開発実施の要約（公開）	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施項目・内容	2
2 - 3. 主な結果	3
3. 研究開発実施の具体的内容（公開）	3
3 - 1. 研究開発目標	3
3 - 2. 実施方法・実施内容	3
3 - 3. 研究開発結果・成果	43
3 - 4. 会議等の活動	47
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況（公開）	49
5. 研究開発実施体制（公開）	49
6. 研究開発実施者（「＊」および「研究参加期間」のみ非公開）	50
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など（公開）	51
7 - 1. ワークショップ等	51
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	51
7 - 3. 論文発表	51
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	51
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	52
7 - 6. 知財出願（国内出願件数のみ公開）	52

1. 研究開発プロジェクト名

都市部コミュニティを含めた自助による防災力と復興力を高めるためのLODE手法の開発

2. 研究開発実施の要約

2 - 1. 研究開発目標

- (1) コミュニティタイプ別標準的実施手法の開発
- (2) LODE実施・普及人材の育成方法とその検証
- (3) 各タイプ別実施方法を含めたLODE手法の体系化
- (4) 自助・互助力の向上を測るための、或いは自助・互助力の向上に有効と思われる指標等の開発
- (5) 個人情報の収集と管理方法に関する研究

2 - 2. 実施項目・内容

1) 『LODE各手法』の第二次試行調査

- ・ 基本LODE中高層住宅地モデル：兵庫県伊丹市、神戸市灘区
- ・ 基本LODE戸建て地区・中高層混在型住宅地モデル：兵庫県伊丹市、三重県鳥羽市
- ・ 子ども対象モデル：兵庫県伊丹市、広島市安佐北区、三重県鳥羽市
- ・ 障害者対象モデル：三重県鈴鹿市
- ・ 困窮世帯の多いコミュニティモデル：大阪市西成区
- ・ 育成LODE（普及コーディネーター・リーダー育成）調査：三重県鈴鹿市、大阪市中心部、大阪市西成区

2) 第2次試行調査の総括分析と研究開発報告に向けた手法の修正検討

第二次試行調査の結果のもとに手法の修正箇所等の検討を行い、本研究開発の成果として報告するための手法をまとめる。

現時点で予定・想定される成果物は次のとおりである。

これらは全て「LODEファシリテータ育成支援ツール」として活用できるものを目指す。

- ・ LODEの体系図表
- ・ モデルコミュニティでのLODE実施状況・結果一覧表
- ・ LODEワークショップ各メニューの説明書
- ・ LODE曼陀羅チャート図表及び項目別説明書
- ・ LODE曼陀羅チャート図表を活用したコミュニティ自己診断用レーダーチャート
- ・ 個人情報取り扱いに関する方針案
- ・ 他

2 - 3. 主な結果

- (1) 地域コミュニティが抱える脆弱さに関する認識とLODEに求められる役割
- (2) 地区の経緯やリーダー等の認識によって異なるLODE導入・実施の目的
- (3) コミュニティのタイプ分けについての考え方
- (4) LODE手法標準化の考え方
- (5) LODE実施・普及人材の育成方法についての考え方
- (6) 自助・互助力の向上を測るための、或いは自助・互助力の向上に有効と思われる指標等についての考え方
- (7) LODE手法標準化に向けた「LODEファシリテータ育成支援ツール」の試案

3. 研究開発実施の具体的内容

3 - 1. 研究開発目標

本年度の取り組みにおいて掲げた研究開発目標は、2 - 1で述べた内容と大きく異なる点はない。また、平成26・27年度研究開発の取り組みで掲げた「研究開発を目指すLODE手法の骨格」（図1参照）に関しても、28年度も引き続きこの考え方の下、取り組みを進めることとした。

加えて、本プロジェクトが本研究開発領域の中において担うべき役割は、「潜在するリスクについて、コミュニティの一人一人に、より正しく認識してもらうための手法」を目指した研究開発であるということも確認している。

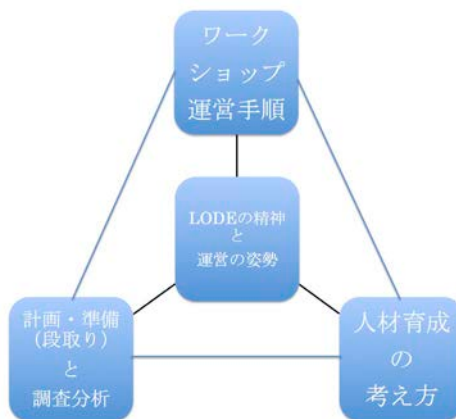


図1：研究開発を目指すLODE手法の骨格

3 - 2. 実施方法・実施内容

平成28年度研究開発の取り組みの流れを4頁図2に整理した。

平成28年度は、前年度の第一次試行調査の成果を受け、マンションや単位自治会等での実施を想定した「基本LODE」や中高年齢層の参加にとどまらず世代の幅を広げるために不可欠な「子どもLODE」、そしてLODEを普及させていく上で中心的な担い手となるであろう社会福祉協議会職員や民生委員、さらには自治会リーダーや災害ボランティアなどに向けた「育成LODE」を重点ポイントとして捉え、第二次試行調査に取り組む

ものとする。

「障害者LODE」に関しては、現時点で障害者や家族が直接参加するモデルを開発することには相当な困難を伴うことから、育成LODEや基本LODEの中で、障害者への理解や対応を促す方法を検討する。

5頁～42頁の(1)～(4)において、第二次試行調査等の実施内容を報告する。

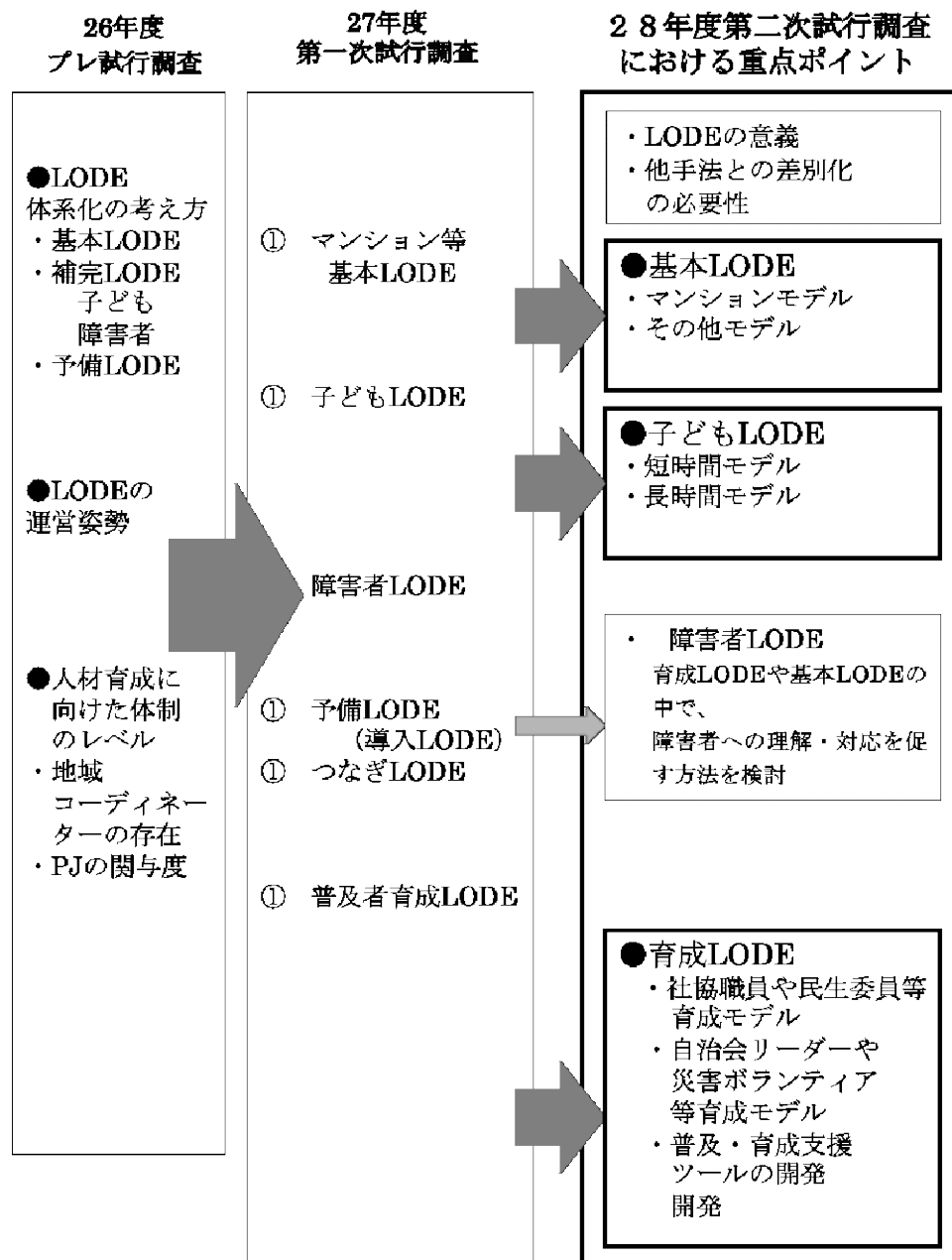


図2：平成28年度取り組みの考え方と流れ

また、28年度の第二次施行調査に関しても、平成26・27年度の取組みにおいて確認されることとなった「地域のコミュニティが自治会だけの一枚岩ではなく、町内会・自治会、子ども会、PTA、障害者家族等の異なるコミュニティが希薄なつながりの中でバラバラに

存在しているのではないかという認識（図3参照）」の下、進めるものである。

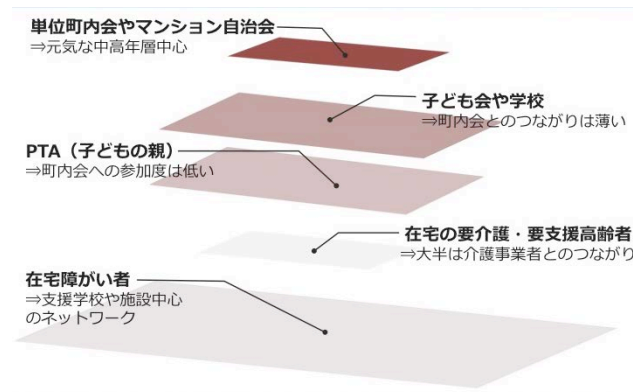


図3：バラバラな地域コミュニティ

（1）第二次試行調査の概括的整理

また、平成28年度は第二次試行調査として、9カ所の地区で計14回のLODEワークショップ・研修会等を実施したが、表2～表4にこれを整理した。表2は調査現場別に所在地、対象コミュニティ、実施日、所要時間、参加者数、対象エリア、タイプや狙い、キーパーソンや参画者、自力度などを、また表3及び表4ではワークショップ等調査時に用いた（導入した）メニューを整理した。

また、9頁以降（2）～（4）では、本年度実施した個々のワークショップ・調査の中から、「モデル候補」になると考えられる6地区9対象について報告する。ここでは26年度・27年度報告書にて整理したLODEの体系化の考え方等に基づき、次の表1に示すように、「基本LODE（自治会やマンション自治会単位）」、「子どもLODE（子ども対象）」等の対象者別のLODEワークショップと、これ等を繋ぐための「つなぎLODE」、さらには普及者の養成を目指した「育成LODE」に分け、報告する。

表1：本書で報告する平成28年度実施タイプ別LODEワークショップ

LODEの タイプ	基本 LODE	子ども LODE	育成 LODE
本報告書 で報告する 現場	伊丹市A地区 M自治会マンション 【都市・混在地区】	広島市安佐北区 子育て支援団体 【短時間モデル】	鈴鹿市 災害ボランティア 【地域リーダー】
	伊丹市A地区 Sマンション自治会 【都市・マンション】	伊丹市A地区 A小学校 【短時間モデル】	
	鳥羽市M地区 離島集落全体 【郡部モデル】	鳥羽市M地区 離島集落全体 【長時間モデル】	大阪市 社協職員 民生委員 【福祉コーディネーター】
	神戸市灘区 大規模マンション 【大都市・マンション】		

表2：平成28年度実施LODEワークショップ試行調査の状況（その1）

実施 年度	現場 所在地	対象 コミュニティ	実施日	所要 時間 (分)	参加者数 (人)	対象エリア：◆					LODEのタイプや狙い：●							キーパーソンや参画者：※										自力度：■			
						マンション自治会	その他の単位自治会	連合自治会	学区区または学校	市区町村域あるいは府県域	基本LODE	子どもLODE	親子LODE	障害者（家族）LODE・障害者家族調査	防災訓練・避難訓練	導入LODE	つなぎLODE（住民・コミュニティ同士）	ファシリテータ・コーディネート育成	啓発・広報イベント	自治会長または自治防災組織の長	子ども会役員、PTA役員	学校、教員	民生委員	社協職員	行政関係者	議会関係者	企業や産業団体等	その他NPO理事や防災ボランティア	自主的に開催を決定し、広報をした	自力で内容を企画した	ファシリテータやコーディネータを務めた
28	神戸市 灘区	Mマンション 防災委員会	2016/11/23	300	234	◆									●		●	●	※			※					※	■	■	■	
28	神戸市 灘区	Mマンション 防災委員会	2017/1/14	300	子ども18 大人15	◆						●	●				●	●	※			※					※	■	■	■	
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/6/3	150	43					◆							●						※	※	※	※	※				
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/8/6	180	11					◆							●						※	※	※	※	※				
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/11/13	150	17					◆							●						※	※	※	※	※				
28	三重県 鳥羽市	離島M地区 子ども	2017/3/11	180	子ども14 大人5		◆					●							※						※		■				
28	三重県 鳥羽市	離島M地区 大人	2017/3/11	120	100		◆				●								※					※			■				
28	兵庫県 伊丹市	A小学校区 M自治会	2016/9/17	120	30		◆				●								※			※	※				■	■	■		
28	兵庫県 伊丹市	A小学校4年生 クラス	2017/1/12	50	子ども120				◆		●						●		※		※	※	※	※			■	■	■		
28	兵庫県 伊丹市	A小学校区 Sマンション 自治会	2017/1/22	120	35	◆					●								※			※	※				■	■	■		
28	広島市 安佐北 区	子育て支援の 場	2016/12/10	60	子ども15 大人5				◆		●											※					※	■			
28	広島市 安佐北 区	子育て支援の 場	2017/2/11	60	子ども15 大人5				◆		●											※					※	■			
28	大阪市 西成区	防災ボラン ティア等	2017/1/28	120	30					◆							●	●					※				■	■			
28	大阪市 中央区	社協職員、民 生委員他	2017/2/26	150	40					◆								●					※				※	■			
28年度合計実施箇所数(計14回・箇所)						3	3	0	3	5	3	5	1	0	1	0	3	6	2	7	0	3	8	8	4	3	0	6	11	6	5

表3：平成28年度実施LODEワークショップ試行調査の状況（その2）

実施 年度	現場 所在地	対象 コミュニティ	実施日	WS等試行調査における実施メニュー：★																								
				1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)	13)	14)	15)	16)	17)	18)	19)	20)	21)	22)	23)	24)	25)
				地域図での図面WS	立面戸割図のテーブル上でのWS	仮想立面戸割図のテーブル上でのWS	立面戸割図の壁掛け式でのWS	五年後LODE図作業	発災時避難行動図上シミュレーション	住戸の表札名を記入してもらう	要援護者数のカウント・確認作業	避難支援マッチングシート（検討・記入）	育成支援ツール（チャート）利用WS	導入質問：今日は何人の方と会話したか	導入：班分け：●●の順に並んでみる	導入映像・画像学習（特に子ども向け等）	ブレゼン：LODEとは	ブレゼン：要援護者について説明	ブレゼン：要援護者の自助支援グッズ	ブレゼン：防災紙芝居	ポストイット等（避難所マーク）	ポストイット等（自助とは）	ポストイット等（何を持って逃げる）	ポストイット等（避難所で困ること）	ポストイット等（避難所で助けを求める人）	ポストイット等（避難所で生かせる得技）	ポストイット等（どんなまちに）	ポストイット等（平時から決めておくこと）
28	神戸市 灘区	Mマンション 防災委員会	2016/11/23																									
28	神戸市 灘区	Mマンション 防災委員会	2017/1/14																									
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/6/3	★		★		★	★							★	★	★			★							
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/8/6														★											
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/11/13														★											
28	三重県 鳥羽市	離島M地区 子ども	2017/3/11	★							★							★				★	★	★			★	
28	三重県 鳥羽市	離島M地区 大人	2017/3/11	★					★		★						★	★				★	★	★				
28	兵庫県 伊丹市	A小学校区 M自治会	2016/9/17	★	★											★			★		★				★			
28	兵庫県 伊丹市	A小学校4年生 クラス	2017/1/12	★					★							★	★			★					★			
28	兵庫県 伊丹市	A小学校区 Sマンション 自治会	2017/1/22		★					★		★																
28	広島市 安佐北 区	子育て支援の 場	2016/12/10												★			★	★									
28	広島市 安佐北 区	子育て支援の 場	2017/2/11	★												★												
28	大阪市 西成区	防災ボランティ ア等	2017/1/28	★		★			★								★	★	★		★							
28	大阪市 中央区	社協職員、民 生委員他	2017/2/26			★			★				★				★		★		★							
28年度合計実施箇所数(計14回・箇所)				7	2	3	0	1	5	1	2	1	1	0	0	3	5	5	6	1	3	2	3	2	2	0	1	

表4：平成28年度実施LODEワークショップ試行調査の状況（その3）

実施 年度	現場 所在地	対象 コミュニティ	実施日	WS等試行調査における実施メニュー：★																										
				26)	27)	28)	29)	30)	31)	32)	33)	34)	35)	36)	37)	38)	39)	40)	41)	42)	43)	44)	45)	46)	47)	48)	49)	50)		
				ホ ス ト イ ツ ト 等 （各 障 害 者 の 避 難 支 援 方 法 ）	災 害 伝 言 ダ イ ヤ ル 説 明	子 ど も の 自 助 力 テ ス ト	手 話 体 験	制 作 体 験 （灯 り、三 種 神 器 箱、ス リ ッ パ）	制 作 体 験 （ス ト ロ ー ハ ウ ス 等）	要 援 護 者 の 名 乗 り 出、紹 介	要 援 護 者 を 訪 問・調 査	ま ち 歩 き・団 地 歩 き、観 察	避 難 行 動 体 験	避 難 住 民 数 カ ウ ン ト・整 理	機 器 操 作 体 験	備 蓄 物 資 な ど の 確 認 や 体 験・物 資 分 配 課 題	防 災 ク イ ズ や ス タ ン プ ラ ー ー な ど の ゲ ー ム	会 食・飲 食	講 演 や 特 別 な 内 容 の 研 修	防 災 映 像 な ど に よ る 学 習	研 究 会・企 画 会 議	体 験 談	班 の 代 表 な ど が 全 体 に 向 か つ て 発 表	参 加 者 全 員 が 発 言 す る 機 会	感 想 ヒ ア リ ン グ 又 は ア ン ケ ー ト	ま ど め フ ア シ リ テ ー シ ョ ン グ ラ フ ィ ッ ク ス	完 成 し た 作 品 等 を 利 用 し た 地 域 イ ベ ン ト 化	事 後 報 告 会 や 完 成 マ ッ プ の 事 後 掲 示		
28	神戸市 灘区	Mマンション 防災委員会	2016/11/23						★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★						★				
28	神戸市 灘区	Mマンション 防災委員会	2017/1/14					★										★											★	
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/6/3																						★	★				
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/8/6																		★					★				
28	三重県 鈴鹿市	災害ボラン ティア等	2016/11/13																			★				★				
28	三重県 鳥羽市	離島M地区 子ども	2017/3/11	★							★	★						★	★					★	★	△ 役員				
28	三重県 鳥羽市	離島M地区 大人	2017/3/11																★					★		△ 役員				
28	兵庫県 伊丹市	A小学校区 M自治会	2016/9/17																	★										
28	兵庫県 伊丹市	A小学校4年生 クラス	2017/1/12															★								★				
28	兵庫県 伊丹市	A小学校区 Sマンション 自治会	2017/1/22													★			★						★		△ 役員			
28	広島市 安佐北 区	子育て支援の 場	2016/12/10					★											★								△ 役員			
28	広島市 安佐北 区	子育て支援の 場	2017/2/11					★										★		★						△ 役員				
28	大阪市 西成区	防災ボラン ティア等	2017/1/28																					★	★					
28	大阪市 中央区	社協職員、民 生委員他	2017/2/26																		★		★		★					
28年度合計実施箇所数(計14回・箇所)				1	0	0	0	3	0	1	2	2	1	1	2	1	4	4	4	1	3	0	4	2	12	0	1	0		

(2) 基本LODE

①神戸市N区大規模マンション（大規模マンション）

a) 対象コミュニティ

- ・大規模分譲マンション（計5棟603戸）。

b) 実施前の状況

- ・管理組合理事会の下に「防災減災委員会」を設置。
- ・平成27年度にプロジェクトアドバイザー及び研究協力者からの紹介を受け、LODEの取組みを開始、LODE図面ワークショップ、第1回防災訓練等を実施した。

c) 今年度実施の経緯と実施の狙い

- ・地元防災活動リーダーたちが、住民の参加率がまだまだ低調であると考え、住民意識を喚起する目的で、住民の参加をさらに促し、防災活動への関心を持ってもらうための取組みを行うこととした。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・防災減災委員会委員長（管理組合理事長経験者）以下、委員会の中に数名の熱心なメンバー（大半は防災士である）。
- ・メンバー中1名は、このマンションを担当する民生委員。
- ・管理組合理事会の他メンバーは、防災活動に対してさほど協力的ではない（防災減災委員会メンバー談による）。

e) LODE実施の狙い

- ・要援護者の把握をしたい。
- ・防災やコミュニティ活動に関し無関心層が多い住民の意識を喚起したい。

f) 実際の実施内容と実施体制

【防災訓練：11月23日実施】

● 防災訓練実施の狙い

- ・参加者が少ないままデータ収集を目的としたワークショップを継続するには限界があり、そのため沈滞気味の住民参加度を上げたい（参加者300名を目標）。
- ・住民同士のコミュニケーション増進を図りたい（狙いは垂直避難を促しやすい上下関係の構築、そのための出会いの場の提供）。
- ・住民にマンションの防災環境・能力を知ってもらい、関心をもってもらいたい。

● 参加者数・協力住戸数

表5：神戸市灘区大規模マンションでの28年度防災訓練参加者数（受付数）

	1番館	2番館	3番館	4番館	5番館	他	計
参加者人数	40名	48名	97名	21名	28名		234名
（参考：前年度参加者数）	(37名)	(39名)	(61名)	(23名)	(24名)	(2名)	(186名)
参加住戸数	26戸	26戸	45戸	13戸	19戸		129戸
安否確認シート貼出し協力住戸数	87戸	75戸	145戸	32戸	83戸		422戸
全住戸数	131戸	112戸	188戸	58戸	114戸		603戸

● 実施内容・手順

08:30 準備開始

09:00 全スタッフ本部前ピロティ（三番館前ピロティ）に集合、
委員長及び役員（本部スタッフ：消防署勤務の住民）より役割分担の確認

09:30 火災発災警報を全館で鳴らす

各住戸は「安全」または「助けが必要」のいずれかの安否確認シートを住戸玄関ドアに貼り出す。

世話人は安否確認シートの貼出し状況の確認調査（全戸調査→本部に報告）。

10:00 避難者は本部前ピロティに集合、各自番館別受付テーブルで受付を済ます。

各番館リーダーは番館の居住者同士が互いに自己紹介と握手するよう促す

各番館リーダーは参加者人数を本部に報告する

理事長から挨拶、役員より本日の説明

リーダーの引率により、番館ごとに5箇所のポイントを巡ってもらう

①救急法の体験 10分

人形を相手に人工呼吸や心臓マッサージなどの救急法を体験する。

AEDの使い方説明も受ける。

②水消火器による放水訓練 10分

スタッフの説明に従って放水訓練を実施する。事前に練習の必要。

③担架訓練 10分

担架で「60kgの重さ（ペットボトル）」を運ぶ体験。救助用担架の体験。

④携帯型発電機の体験と水リュック運搬体験 10分

カセットボンベ式ガス発電機での充電体験や、6リットル飲料水リュックを背負って歩く体験を行う。

⑤ポンプ室見学と防災倉庫の説明 10分

ポンプ室を見学し、浸水・停電時にポンプが稼働しなくなったときの説明を聞く。

防災倉庫で、保管機器・備蓄用品等について説明を受ける。

⑥防災学習映像の鑑賞コーナー 10分

映像による防災研修を受けて知識を得る。

【番館毎の巡回順】

1 番館：①→②→③→④→⑤→⑥

2 番館：②→③→④→⑤→⑥→①

3 番館：③→④→⑤→⑥→①→②

4 番館：④→⑤→⑥→①→②→③

5 番館：⑤→⑥→①→②→③→④

10:30 「助けが必要」の安否確認シートを貼出した住戸を友愛ボランティア訪問。

11:00 ポイント巡り終了

11:00 炊き出しコーナー（イカ焼きコーナー、ぜんざいコーナー）で各自食事

13:00 世話役・ボランティアメンバーによる反省会

14:00 片付け開始（14時までに完全終了）

● 主な結果

【世話役・ボランティアメンバーによる反省会における意見（24名出席）】

- ・ 昨年と比べ開催時期が1ヶ月以上遅く、寒さも厳しかったが、昨年を超える参加者があったことは評価に値する。
- ・ 400戸以上（全体の7割）の住戸が「安否確認シート」の掲示に協力してくれた。HAT地域全体の訓練の時の協力者は50戸程度だったので、比べものにならないほどであった。少しずつ防災減災委員会の活動が浸透してきているように感じる。
- ・ 1枚だけ「救助してください」という手書きの安否確認シールがあったので訪問した。女性の方が「車椅子に玄関横になかったらデイに行ってるので無事だと思ってください。でも車椅子があったら、中に本人はいるので安否確認して欲しい」ということであった。このような細かなやり取りを重ねていくことが住民からの信頼を得ることに繋がると思う。
- ・ 4～5年前、理事長をやっていた当時は、ここまで活動が発展するとは想像ができなかった。
- ・ シートに「寒い中ありがとうございます」という手書きのメッセージがあった。確実に、防災減災活動が認知されてきていると思う。
- ・ KG集合住宅のモノマネ活動の部分もあるが、現時点ではそれでも構わないと思う。
- ・ 参加者から質問が多かったのは、トイレの凝固剤について。少しずつ「我が事意識」が高まってきていると思われる。
- ・ 災害時トイレが2口だけしかないのかという意見も多かった。
- ・ 昨年度は、「私一人が踏ん張ってもどうしようもない」と嘆いたのに、今年度は役員、ボランティアの協力人数・協力度合いが全く違う。

● 現場写真

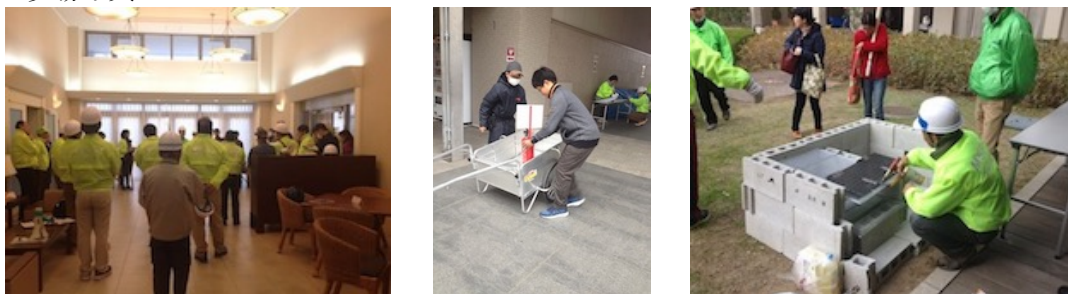


写真1・2・3：防災訓練の準備（子どももお手伝い）



写真4・5・6・7・8

左から（受付、担架訓練、簡易発電機、水リュック体験、救急法体験）

【震災祈念灯りイベント：1月14日実施】

- 震災記念イベント実施の経緯と狙い（コミュニティ側の考え方）
 - ・ 1月17日震災記念イベントの数々は、昨年度までは公的機関がリードする形でこれまで継続されてきたが、今年度からは縮小されていくと言われている。対してマンション防災減災委員会では、世間の縮小気運にかかわらず、将来にわたって震災祈念を担っていきたいという気概を持っている。
 - ・ そこで、昨年度に引き続き、住民たちの心に残る、子ども達も参加してくれる震災祈念灯りイベントの継続実施を企画した。
- 参加者数
 - ・ 子ども 18名
 - ・ 大人 15名
- 実施内容
 - 13:00：準備開始、サークルルーム内の作業テーブル設営
 - 14:00：参加者、スタッフ全員がサークルルームに集合、マンション委員長より挨拶
 - 14:10～16:00：「空き瓶を灯りとして利用するための装飾・制作ワークショップ」
空き瓶の表面に思い思いの絵を描いた布を貼り付ける
 - 15:00～17:00：ぜんざいコーナー設置
 - 17:00～19:00：空き瓶灯りを地域の方々に楽しんでもらうための灯りイベント
屋外階段に並べた300個の瓶の中に入れた蠟燭に点灯していく
- 観察調査によるポイント整理
 - ・ 参加人数は昨年度に比べやや少なかった。今後継続を考えるならば、次年度（3回目）は、さらに居住者たちの参加を得られるように工夫しなければならないと思われる。
 - ・ 子どもたちが大人との共同作業に取り組みながら、大人と言葉を交わす場面が多く見られた。
 - ・ 隣接するマンション団地からも1名の参加があった。
- 現場写真



写真9・10・11：震災祈念灯りイベントの様子

②伊丹市Sマンション（1月22日実施：マンション）

a) 対象コミュニティ

- ・ 分譲マンション（計2棟170戸）。

b) 実施前の状況

- ・ 管理組合（所有者組織）と自治会（住民組織）の二輪体制によるコミュニティ。
- ・ LODE図上ワークショップは、自治会主催により、平成26年2月、平成27年2月、平成28年2月と、過去3ヵ年、毎年取組んできた。

c) 実施の経緯

- ・ 自治会長からの要請。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ マンション自治会長。
- ・ このマンションを担当する民生委員1名（マンション居住者）。

e) LODE実施の狙い

- ・ これまで培ってきたマンション住民間のつながりを維持・増進したい。
- ・ 高齢者がますます多くなるマンションの見守り力を増強したい。
- ・ 図上のワークショップから、実際の防災訓練に繋がられるような内容に取組みたい。

f) 実際の実施内容と実施体制

- 参加者数と参加者層：35名（うち当該マンション居住者35名）

- 実施内容と結果

次頁及び次々頁の表に示す。

- 観察調査等からの考察

- ・ 当日は伊丹市社協の防災イベントと日程のバッティングが起こったが、当該マンション住民だけで前年度の27名を上回る35名の参加者を得た。
- ・ 入居者全戸の苗字を記入する作業では、「誰が住んでいるか知らない住戸」・「住んでいる人を間違って認識していた住戸」の合計が1戸（全体の0.6%）に過ぎなかった。35名（35戸から1名ずつ参加として全体の20.6%）の居住者が99.4%の住戸の情報を掴んでいるということがいえる。この数値は、27年度の数値を1割以上上回るものであった。
- ・ 今回、初めて「要援護者の個別避難支援計画」の検討を班別に行ったが、支援が必要な状況、必要な支援の内容、必要な支援者の人数、支援者候補の特定などを問題なく行うことができた。「要援護者の個別避難支援計画」の検討では、各班の住民たちが、要援護者の状況や世帯事情、さらには当該要援護者とコミュニケーションを取りやすい住民の情報などをきめ細かく把握できていることが判明した。また、当日「認知症予備軍的高齢者」が2名参加していたが、周りの参加者たちが、当該高齢者を無視することなく、集団の中で安心して参加できるように対応していたことなど（例えば「●●さん、困ったことがあったら必ず私が駆けつけるから安心してね」という言葉かけなど）は、住民の成長を感じさせるものであった。
- ・ 取組み開始から3年間を経過し、参加住民層（自治会役員や班の中での世話役または世話役経験者が多数）の意識は確実に高まり成長を遂げていると思われる（自治会長、自治会副会長、民生委員、伊丹市社協担当者等へのヒアリングでも確認）。
- ・ リーダーの育成面でも、今回初めて自治会長がワークショップの司会を部分的に勤めたり、防災機器の説明役を担ったりと、確実な進歩を遂げている。

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
 平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
 復興力を高めるためのLODE手法の開発」
 研究開発プロジェクト年次報告書

表6：伊丹市Sマンション自治会での基本LODEの実施手順（その1）

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
実際順番	1	2	3	4	5	6	7	8
所要時間	30	3	12	2	3	5	20	10
時刻	9:00～9:30	9:30～9:33	9:33～9:45	9:45～9:47	9:47～10:00	10:00～10:05	10:05:00～10:25	10:25～10:35
実施時刻	9:00～9:37	9:37～9:41	9:41～9:53	9:53～9:54	9:54～10:03	10:03～10:05	10:05～10:23	10:23～10:42
カテ	準備	導入				マンションタイプの図上ワークショップ		
タイトル	会場作り・雰囲気作り	プロジェクトメンバー紹介 参加者紹介	集合写真撮影	LODEワークショップ開始	昨年度までのLODEワークショップのおさらいと本日作業の意味の説明	プレゼン：マンションLODE図上作業手順の説明	作業：表れを書き込み要援護者の所在を凡例シールによって示す作業	お助けタイム
達成すべき目標	会場セッティングを行いながら参加者の緊張をほぐすために参加しやすい雰囲気を創出する。	プロジェクトメンバーや参加者を知り、作業へのウォーミングアップを行う	参加者全員で集合写真を撮影し、作業しやすい雰囲気を創出する。	和やかな雰囲気に加え、これからワークショップに取り組むための意識の転換を促す。	今回の作業の前段となる昨年度までのワークショップの達成段階を思い出しってもらうとともに、本日の作業の意味も理解してもらう。	一昨年度、昨年度に続く、マンションLODEワークショップの手順に関して理解を促す。	参加者各自に「自分の近所の住民の顔」や「要援護者」を思い出すとともに改めて認識してもらう。	班内のメンバーだけでは思い出せない「自分の近所の住民の顔」や「要援護者」を他班メンバーの力を借りて思い出すとともに改めて認識してもらう。
生成物	テーブルなどがセッティングされた会場と和やかな参加しやすい雰囲気	作業しやすい雰囲気	作業しやすい雰囲気	ワークショップに取り組むための真剣な雰囲気	今回の作業のスタート時点認識となる「昨年度作業までの到達レベル」と「今回のLODEワークショップの意味」の理解	マンション立面戸割図を用いたLODEワークショップの手順に関する参加者の理解	各住戸の表れ名が書き込まれ、かつ要援護者等の情報シールが貼られた立面戸割図	全参加者の総力により、各住戸の表れ名が書き込まれ、かつ要援護者等の情報シールが貼られた立面戸割図
作業単位	各人（来場順）	全体	全体	全体	全体	全体	テーブル別グループ（1～4班）	テーブル別グループ（1～4班）
進め方	参加者の受付時に、講師側が挨拶し、一声ずつ声かけし、和やかな雰囲気を創る。	プレゼン	集合写真撮影	プレゼン	プレゼン	プレゼン	作業：図中の各住戸に表れ名を記入していくとともに、凡例に従って要援護者等シールを貼っていく	情報交換作業
	あらかじめテーブルを指定して着席してもらう（4班を予定）	1. 挨拶 2. LODEプロジェクトメンバーを紹介 ①南都 ②橋 ③倉原先生 ④森本、藤本、大西 3. 参加者に4つの班別テーブルへ移動してもらう ・1・2班 ・3・4班 ・5・6・7班 ・8・9班 4. テーブル内自己紹介と班長決定	1. 撮影 2. 撮影後、参加者同士で握手	1. ワークショップの開始を宣言 2. 司会役をバトンタッチする橋を紹介	1. 橋から平成27年度作業の到達点を示して評価する（平成26年度と比較する）。 2. 自主防災の最大の目的は「顔の見える関係づくりによる安心感の獲得」であること、それは集合写真撮影や握手から始まっていることを説明。	1. 橋から、まずは全住戸の「表れ名」を記入する作業を指示。 2. 続いて、凡例表に従って要援護者等の住民シールを貼る作業を指示。 ①自宅：銀の★ ②乳幼児：オレンジ丸 ③未就学児：黄色丸 ④小学生：水色丸 ⑤中学生：青色丸 ⑥前期高齢者：紫丸 ⑦後期高齢者：赤丸 ⑧特に配慮や支援が必要な人：ハート	1. 全住戸の「表れ名」を記入する作業 2. 凡例表に従って要援護者等の住民シールを貼る作業 ①自宅：銀の★ ②乳幼児：オレンジ丸 ③未就学児：黄色丸 ④小学生：水色丸 ⑤中学生：青色丸 ⑥前期高齢者：紫丸 ⑦後期高齢者：赤丸 ⑧特に配慮や支援が必要な人：ハート	全員が他のテーブルを回り、自分が知らなかった自分の隣の住民情報を得たり、自分が知る他班情報を提供したりという情報交換作業を行う。
		5. 最後に参加者に配布予定の防犯・防災ベルの使用法を説明する。			3. 南都にマイクを渡し、南都からもコミュニティ相隣関係（住民同士のコミュニケーション）が徐々に改善・構築されてきていることを評価した。		実際には表れ書き込み作業とシール貼り作業を並行して行った。	
役割	マンション側が主に対応	●プレゼンター：N自治会長	●コーディネーター：N自治会長 ●撮影者：O副会長ほか	●プレゼンター：N自治会長	●プレゼンター：橋、南都	●プレゼンター：橋	●全体コーディネーター：橋 ●テーブルファシリテーター：住民の民生委員や自治会役員	●全体コーディネーター：橋 ●テーブルファシリテーター：住民の民生委員や自治会役員
	観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
	記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール	●受付名簿	●防犯・防災ベル	●集合写真撮影用カメラ			●凡例表シート（各班に複数枚） ●A棟立面戸割図（第1・第2テーブル） ●B棟立面戸割図（第3・第4テーブル） ●凡例シール各種 ●マジックペンセット	●凡例表シート（各班に複数枚） ●A棟立面戸割図（第1・第2テーブル） ●B棟立面戸割図（第3・第4テーブル） ●凡例シール各種 ●マジックペンセット	●凡例表シート（各班に複数枚） ●A棟立面戸割図（第1・第2テーブル） ●B棟立面戸割図（第3・第4テーブル） ●凡例シール各種 ●マジックペンセット
場所	Sマンション共同集客室							

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

表7：伊丹市Sマンション自治会での基本LODEの実施手順（その2）

作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15	作業16
9	10	11	12	13	14	15	16
10	5	20	10	5	15	5	40
10:35～10:45	10:45～10:50	10:50～11:10	11:10～11:20	11:20～11:25	11:25～11:40	11:45～11:50	11:50～12:30
10:42～10:49	10:49～10:57	10:57～11:15	11:15～11:23	11:23～11:35	11:35～11:51	11:51～11:54	12:00～12:30
マンションタイプの図 上ワークショップ	要援護者避難支援計画検討作業			結び	結び	結び	会食での意見聴取
集計・発表	プレゼン：要援護者 避難支援計画検討作 業内容の説明	作業：要援護者避難 支援計画検討作業	検討結果発表	まとめと講評 (その1)	防災関連機器の 紹介と体験	まとめと講評 (その2)	ヒアリング
作業で図示できた表 札名や各凡例別の要 援護者等について 班別にその人数を集 計・全体発表し、マ ンション全体での表 を作成する。	図面作業でハート印 がついた方に関し て、発災時避難支援 計画の検討を行うた めの方法を示し、 シール貼りの作業か ら一歩「実際の発災 時における行動」を イメージし、認識し てもらう。	図面作業でハート印 がついた方に関し て、発災時避難支援 計画の検討を行い、 マンションのコミュ ニティリーダー層で ある参加者に要援護 者避難支援の実際行 動へのイメージと認 識を持ってもらう。	作業結果としての検 討シートの内容を班 長から全体発表し、 マンション全体での 要援護者の避難環境 に関する認識を共有 する。	参加者住民に、外側 の目（講師）による 講評を聞いてもら い、次の活動のため の意識づくりをおこ なう。	自治会で購入した防 災機器を披露・説明 し、体験してもら うことで、今後の避難 訓練に移行して行く ための意識づくりを 行う。	参加者住民に、外側 の目（講師）による 講評を聞いてもら い、次の活動のため の意識づくりをおこ なう。	今回参画への感謝と 今後の継続的参加を 依頼するとともに、本 日の評価・課題指摘 の簡単なヒアリング 調査を行う。
「表札書き込み戸数」 と「要援護者数」のマ ンション全体での集 計表。加えてそれ によってより促進される 参加住民のコミュニ ティや要援護者支援 に対する意識。	シール貼りの作業か ら一歩「実際の発災 時における行動」に 踏み出した「要援護 者避難支援計画」を 検討・作成するため の意識や認識。	書き込まれた要援護 者避難支援計画検 討シートと、その検討過 程で生成される参加 者の意識。	参加住民の、マンシ ョン全体での要援護者 の避難環境に関する 認識と意識。	参加者の今回研修会 の意義確認と次回へ の意識。	今後の避難訓練に移 行して行くための参 加者の意識や関心。	参加者の今回研修会 の意義確認と次回へ の意識。	今後の参加への意欲 とヒアリング結果。
テーブル別グループ 及び全体	テーブル別グループ (1～4班)	テーブル別グループ (1～4班)	テーブル別グループ 及び全体	全体	全体	全体	全体
集計・発表作業	プレゼン	計画検討作業	発表作業	プレゼン	プレゼン と体験	プレゼン	ヒアリング
1. 各班毎に、班 内の各人数・戸数 をカウントする。 ①表札が書き込め た戸数 ②乳幼児人数 ③未就学児人数 ④小学生人数 ⑤中学生人数 ⑥前期高齢者人数 ⑦後期高齢者人数 ⑧特に配慮や支援 が必要な人の人数 2. 各班の代表が 全体に向かって発 表する。	1. 与条件 ・南海トラフ地震 ・避難指示 2. 検討内容指示 ・対象者の困難状 況の把握 ・想定される避難 の方法 ・必要支援の内容 ・必要支援人数 ・想定される特定 の支援者 3. 計画検討シー トへの記入を指示	左欄の条件に基づ いて、計画検討作 業と計画検討シー トへの記入を行 う。	班毎に、要援護者 一人一人につい て、次の項目を踏 まえながら発表す る。 ・対象者の困難状 況の把握 ・想定される避難 の方法 ・必要支援の内容 ・必要支援人数 ・想定される特定 の支援者	1. 南部からの講 評 よく意見が飛び交 うようになった。 しかし、子供や若 い世代が少ない。 5年後を想像したら 恐ろしいのではな いか。 5年後は支援する人 も高齢化してく る。	1. N会長から購 入した防災機器の 報告・紹介・取り 扱い説明 ・軽量リヤカー ・折りたたみ式担 架 ・非常ライト 2. 使用体験	1. 倉原からの講 評 表札をほとんど埋 められたことは素 晴らしい結果。毎 年確実に成長して いると思う。 今後、実際の避難 訓練などに移行し ていってほしい。 そのための動きも 生まれ始めている 。	食事の雰囲気の中 で、遠慮のない本音 の意見を収集する。 会長や副会長、民生 委員住民等から ・3ヶ年の継続が 徐々に実を結んで きている。 ・本日の会場の中 での「避難予備 軍」と思ひき2名 の発見と対応も、 この3年間の積み 重ねが生きている 。 ・高齢化コミュニ ティなので、無理 なく徐々に少しず つ「避難行動訓練」 や「避難生活訓 練」へとシフト していきたい。 というような意見 が出された。
●全体コーディネ ーター：橋 ●発表者：各班班長	●プレゼンター： 橋、南部	●全体コーディネ ーター：橋 ●テーブルファシリ テーター：住民の民生 委員や自治会役員	●全体コーディネ ーター：橋 ●発表者：各班班長	●プレゼンター： 南部	●プレゼンター： N会長、O副会長、 K民生委員	●プレゼンター： 倉原	●コーディネ ーター：南部 ●補助：橋
倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
●凡例表シート（各班 に複数枚） ●A棟立面戸割図 （第1・第2テーブル） ●B棟立面戸割図 （第3・第4テーブル） ●凡例シール各種 ●マジックペンセット	●各班で作業結果と して残った立面戸割 図 ●要援護者避難支援 計画シート（A3） ●筆記具（ボールペ ンなど）	●各班で作業結果と して残った立面戸割 図 ●要援護者避難支援 計画シート（A3） ●筆記具（ボールペ ンなど）	●各班で作業結果と して残った立面戸割 図 ●要援護者避難支援 計画シート（A3） ●筆記具（ボールペ ンなど）	●各班で作業結果と して残った立面戸割 図 ●要援護者避難支援 計画シート（A3） ●筆記具（ボールペ ンなど）	●軽量リヤカー ●折りたたみ式担架 ●非常ライト		
Sマンション共同集會室							

●現場写真等



写真12（図上作業の様子）

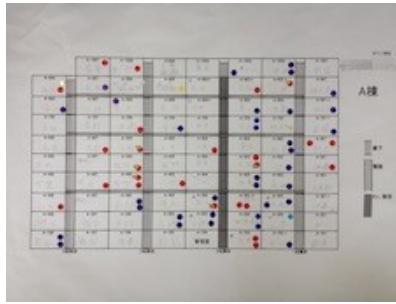


写真13・14（作業の結果できあがった情報図）



写真15・16・17

（左：要援護者数等の集計、中：防災関連機器の体験、右：会食ヒアリング）

表8：要援護者避難行動支援計画の検討結果（15名中4名分の事例）

2017年1月22日SHAYS LODEワークショップ：1・2班

避難行動支援計画検討結果（発災の想定【災害の内容：震度6強の地震。物資の確保等の面から避難所に向かう】）

住戸NO	要援護のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなれる人は？
掲示しない	その他（ダウン症）	垂直避難（下の階へ） 外部への避難（避難所）	コミュニケーションを取りながら避難してもらうためのサポートが必要。	2～3人	・家族 ・A-000のNさんがコミュニケーションが取れる
掲示しない	身体の不自由（心臓にペースメーカー）	垂直避難（下の階へ）外部への避難（避難所）	ペースメーカーが正常に作動していれば大きな問題はないが、誰かが注意してあげた方がいい。	1～2人	・仲が良くて鍵も預かっているB棟Kさん
掲示しない	身体の不自由 （後期高齢者夫婦だが、奥さんの方が退院したばかりで、しかも重病である。移動するのが難しい）	自宅避難	自力移動は困難なため、自宅を非難がベターだと考える。必要物資の分配や、病状確認、さらには医療機関との連絡のためサポートが必要。	2～3人	・同じ階段の住民たち（WSに参加している）
WSに参加しているFさんご自身からの申告	病気や障害を特定はできないが、最近体調等に自信がなくなっている。万一の時にはサポートしてほしい。	垂直避難（下の階へ）外部への避難（避難所）			・娘家族で足りない場合、WSの皆さんにも支援願いたい。

③伊丹市A小学校区M自治会（9月17日実施：中高層住宅混在地区）

a) 対象コミュニティ

- ・ A地区（小学校区）の中の単位自治会（戸建住宅とマンションとの混在地区）

b) 実施前の状況と実施の経緯

- ・ 平成25年度より、小学校区内を対象エリアとする「A小学校地区地域福祉ネット会議」を設置（まちづくり組織役員、民生委員、災害ボランティア、社協職員、包括支援センター職員、市代表などから構成）。
- ・ 平成25年12月に学校区単位で図上防災ワークショップの講習を開催した（講師役は災害ボランティアネットワーク鈴鹿チーム）。
- ・ 平成26年度は「まち歩きイベント」を実施し、その調査結果を『地区防災マップ』としてまとめた。
- ・ 平成27年度は『地区防災マップ』の印刷を行ったが、そのために地区内の企業を訪問、協賛金の依頼やヒアリング調査を実施した。
- ・ 6月から「A小学校地区地域福祉ネット会議」を毎月開催し、当該ワークショップの企画も検討してきた。
- ・ コミュニティ側のメンバーが講師役を担うことから、倉原PJ側にアドバイス・チェック役の要請があった。

c) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ まちづくり組織役員、民生委員、災害ボランティア、社協職員、包括支援センター職員、市代表から成る「有岡小学校地区福祉ネット会議」組織を構成している。
- ・ その中で当該自治会の会長もネット会議メンバーの一人である。

d) LODE実施の狙い

- ・ これまでA地区で3年間学んだLODEを、Sマンションに続き、学校区内自治会での実際現場において研修会を実施する（基本LODE）。
- ・ ネット会議側のメンバーに講師役を担ってもらうことで、LODEのファシリテーター・普及者となってもらうための訓練とする（育成LODEとしての性格）。

e) 実際の実施内容

●参加者数 約30名

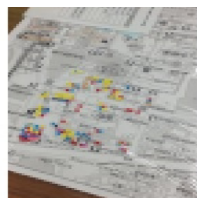
●実施内容

- ・ 次頁の表9に9月17日研修の内容を整理する。

●現場写真



写真18・19



（左：凡例表、右：シールで情報の貼られた地図）



写真20

（伊丹市A地区M自治会のワークショップの様子）

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8	作業9
実際順番	1	2	3	4	5	6	7	8	9
所要時間	3	5	10	10	10	10	50	7	15
時刻	14:00～14:03	14:03～14:08	14:08～14:18	14:18～14:28	14:28～14:38	14:38～14:48	14:48～15:38	15:38～15:45	15:45～16:00
実際時刻	14:10～14:13	14:13～14:22	14:22～14:32	14:32～14:40	14:40～14:48	14:48～15:25	15:25～15:43	15:31～15:58	
カテ	導入	導入	ウォーミングアップ ポストイットワーク	ウォーミングアップ ポストイットワーク	ウォーミングアップ ポストイットワーク	図上WS	図上WS	結び	
タイトル	挨拶	ネット会議メンバー紹介とLODEマップ研修の目的	作業：あなたは避難所のマークが書けますか？	作業：あなたが避難所へ行ったとき活かせる特技は何ですか？	作業：災害が起こった時、あなたに必要なものは？	プレゼン：LODE図上WS作業手順	作業：地区や棟別に要援護者の存在を凡例シールによって示す作業	地区の防災・福祉マップの説明	まとめと講評
達成すべき目標	参加住民のやる気を喚起する	講師世話役のメンバーとLODEの目的を伝える	参加者にまず「避難所」の存在を考えてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	次に、避難所でできる自分の役割について想像してもらおう。	参加者にLODEの目的のひとつが「自助」であることを意識してもらおう。	LODE図上作業のシールの凡例に関して理解を促す	参加住民に「自分の地区や住棟に居る要援護者」を認識してもらおう	地区の防災・福祉マップについて認識を高めてもらう	参加者に、外傷の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう
生成物	参加住民のやる気	作業しやすい雰囲気とLODEの目的に対する住民の理解	参加者たちの「避難所」を配したポストイット	参加者たちの「避難所」を配したポストイット	参加者たちの「災害時必要なもの」を記したポストイット	LODEワークショップの基本的手順に関する参加住民の理解	各棟参加住民が認識する要援護者情報(住宅地図または立面戸割図)	参加住民の防災・福祉マップへの認識	参加住民の今後に向けた意識
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	班別グループ(自治班別またはマンション別グループ)	全体	全体
進め方	1. 挨拶	1. スタッフ紹介 今回の研修会を企画・運営する「小学校地区福祉ネット会議」メンバーを紹介する	作業：「あなたは避難所のマークが書けますか？」を	作業：「避難所で行くことができればあなたの特技は？」を	作業：「災害が起こった時、あなたに必要なものは？」を	各凡例シールの意味を説明する	作業：班員同士話し合いながら、凡例に従って、自宅や要援護者シールを貼っていく	1. プレゼン	プレゼン
		2. LODEの目的の説明 福田氏は「顔と顔をつなぐことによる安心感」を訴えた。	作業指示 ①「あなたは避難所のマークが書けますか？」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	作業指示 ①「避難所で行くことができればあなたの特技は？」を2分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	作業指示 ①「災害が起こった時、あなたに必要なものは？」を2分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	凡例シール説明 ①自宅 ②65歳以上女性 ③65歳以上男性 ④障がいのある方 ⑤中高生 ⑥小学生 ⑦幼児 ⑧赤ちゃん ⑨手助けが必要な高齢女性 ⑩手助けが必要な高齢男性 ⑪ペット犬 ⑫ペット猫 ⑬お助けマン	順々に作業指示 ①自宅 ②65歳以上女性 ③65歳以上男性 ④障がいのある方 ⑤中高生 ⑥小学生 ⑦幼児 ⑧赤ちゃん ⑨手助けが必要な高齢女性 ⑩手助けが必要な高齢男性 ⑪ペット犬 ⑫ペット猫 ⑬お助けマン	防災・福祉マップのできるまで、協力者の方々などについて説明。 (15:25～15:31) (15:36～15:39)	LODEの提唱者であり、これまで有岡地区のアドバイスを担当してきた南部やLODEの原初企画者の一人橘、チームの代表者倉原教授からそれぞれ簡単な講評を発表 南部 (15:31～15:36) (15:53～15:58)、橘 (15:43～15:48)、倉原 (15:49～15:53)
		3. LODE各4文字にめられた意味の説明	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。		途中で他の班の作業状況を観察するための時間を確保 (15:12～15:22)	2. 協力組織である包括支援センターのメンバーを紹介 (15:39～15:43)	
		4. 各テーブル上の地図や文具等の確認				2つの作業に分けず、「ひとつひとつ凡例を説明しながらシールを貼る」というように一体的に行われた。			
役割	●挨拶 ・M町自治会B会長	●プレゼンター： ネット会議F副委員長(民生委員) ●補佐：ネット会議民生委員4名	●プレゼンター： ネット会議F副委員長(民生委員) ●補助者：各テーブルからポストイット回答を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター： ネット会議F副委員長(民生委員) ●補助者：各テーブルからポストイット回答を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター： ネット会議F副委員長(民生委員) ●補助者：各テーブルからポストイット回答を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター： ネット会議F副委員長(民生委員)	●プレゼンター： ネット会議F副委員長(民生委員) ●テーブルファンリター 各班1名(ネット会議メンバーが担当)	●プレゼンター： ネット会議F副委員長(民生委員)	●講評者：南部、橘、倉原
観察	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘	倉原、南部、橘
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール		●LODEの4文字の意味を説明する4枚を大利用紙に説明書きしたもの(記入用)。 ●各テーブルに「小学校地区防災福祉マップ、マンション棟別立面戸割図または住宅地図、凡例表、凡例シール、ポストイット、マジックペン等筆記具	●ポストイット大、マジックペン(人数分) ●正解となる「避難所のマーク」を大利用紙に説明書きしたもの	●ポストイット大、マジックペン(人数分) ●回答を促すためのイメージイラスト3枚(料理する、掃除する、子供の世話をする)の大利説明書き	●ポストイット大、マジックペン(人数分)	●凡例表シート(参加者各人に1枚)	●「全体防災マップ、及び地区別住宅地図またはマンション棟別立面戸割図、並びに上掛けフィルムシート ●凡例シール各種	●「小学校地区防災・福祉マップ	
場所	伊丹市K会館								

④鳥羽市M地区集落全体（3月11日実施：郡部離島地区）

a) 対象コミュニティ

- ・鳥羽市M地区（離島集落、人口630人、高齢化率45%）の集落全体が対象。
- ・平日の日中は、集落の中に児童や学生、通勤者等が不在となり、高齢化率が著しく高くなる特徴をもつ。
- ・コミュニティは非常に密であり、防災課題も「地震による津波」であることが住民間で共通認識となっている。

b) 実施前の状況と実施の経緯

- ・約10年前、南部等が講演で訪問して以来、夏期には「鈴鹿子ども防災サミット」に子どもを派遣する等、災害ボランティアネットワーク鈴鹿とは繋がりがあった。
- ・しかし、当時以上に高齢化が進み、加えて小学校が廃校になるなど、自主防災組織もこのままでは弱体化を免れ得ないという危機感があった。
- ・そこで、3月11日の東日本大震災の発災6年後の日に、集落の大人と子供を対象とした防災研修を開催し、それを契機に自主防災組織の強化を図るとともに、再度『要援護者台帳』の作成・更新をするべく、今回の企画を行うこととなった。

c) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・鳥羽市職員であり、自主防災組織の役員でもある居住者S氏が取りまとめ役、連絡調整役を担っている。
- ・S氏の周りには、自主防災組織の仲間が数名いて、非常に連携も上手くとれている。

d) 今回のLODE実施の狙い

- ・3月11日の日中に子ども対象の研修会を、またその日の夜にそれを引き継ぐ形で大人対象の研修会を実施して、集落ぐるみで防災活動の再活性化の契機とする。
- ・住民には、とりわけ昼間と夜間の防災体制が大きく異なるという課題を認識してもらう。

e) 実際の実施内容

- 参加者数 約100名（夜の部の大人の参加者だけの数字）
- 実施内容
 - ・次頁以降の表10・11に3月11日研修の内容を整理する。
- 現場写真



写真21・22（夜間は100名を超える住民が参加）

写真23（更新したい世古別カラー分類の要援護者台帳）

f) 参加者の反応

- ・終了時に感想をポストイットに書いてもらったが、ほとんどすべてが好評であり、再度の開催や継続的開催を要望する意見も多かった。

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

表10：鳥羽市M地区（離島地区）での基本LODEの実施手順（その1）

順番	作業1		作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7
実際順番	1	2	分岐	5	3	4	省路	省路
所要時間	10		3	3	2	5	12	1
時刻	19:00～19:10		19:10～19:13	19:13～19:16	19:16～19:18	19:18～19:33	19:33～19:45	19:45～19:46
実際時刻	～19:00	19:00～19:31		19:35～19:42	19:31～19:33	19:33～19:38		
カテゴリ	受付	導入	導入					自助について
タイトル	受付・雰囲気作り	雰囲気作り	プロジェクトメンバー紹介 参加者紹介	LODEとは	今回のRISTEXの研究開発プロジェクトについて	プレゼン：「高齢者三種の神器」他	作業：「あなたにとっての三種の神器」とは？	プレゼン：なぜ「自助」は必要か？
達成すべき目標	参加者の緊張をほぐすために参加しやすい雰囲気を創出する。	子供達の活動を知らせることで、「集客くるみ」であることを意識させる。 三重県防災ヘリの活動を知らせることで、「防災」への意識を高めさせる。	プロジェクトメンバーや参加者を知り、作業へのウォーミングアップを行う	・LODEが重視する「要援護者の情報と支援」の重要性を理解してもらう ・普及者育成LODEの意義を理解してもらう。	当研究開発事業に対する参加者の理解・認識を促す。	自助の考え方の一例を学んでもらう。 要援護者の生命の危険やOOL低下につながりかねない事態の一例を学ぶ。	南部からの「東北の高齢者の入れ道」の話聞いた後、参加者に「あなたにとっての三種の神器とは」を考えってもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	自助の必要性に関する参加者の理解を促す。
生成物	和やかで参加しやすい雰囲気	和やかで参加しやすい雰囲気	作業しやすい雰囲気	・要援護者対応を重視したLODEに対する参加者の初期的理解 ・普及者育成プログラムに対する参加者の理解	RISTEX研究開発事業及びLODEに対する参加者の理解・認識（背景理解）	要援護者支援の考え方に関する参加住民の理解・認識	参加者たちの「自助」意識を記したポストイット	自助の必要性に関する参加住民の理解
作業単位	各人（末席順）	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
進め方	参加者の受付時に、講師側が挨拶し、一声ずつ声をかけし、和やかな雰囲気を創る。	プレゼン	プレゼン	プレゼン	プレゼン	プレゼン	作業：「あなたにとっての三種の神器」をポストイットに書いてもらう	プレゼン
	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を実しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	南部より1. 日中子どもLODEを実施したことを報告。子どもたちの取り組みとの連続性が高いことを指摘。 2. 三重県救助ヘリ部隊U氏を紹介	LODEプロジェクトメンバーを紹介する ②プロジェクト代表倉原先生 ③MPO館長メンバー：伊藤、内山、内山、小西、南部富、南部綾 ④研究メンバー：橋、大西、森本 ⑤RISTEX古屋様を紹介する 倉原の紹介時間は、作業11の中で確保した。	地域特性や高齢者の多さに対応して、優しい言葉を用いたプレゼンとなった。 LODEのVに代えるLOVE。 恋人愛が大事だということを読んだ。	古屋様に口頭でご説明した	南部美智代から、「高齢者三種の神器入れ」を披露・説明する	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「自分にとっての三種の神器は」を3分以内にポストイットに書く（ポストイットは種別に色分け配布） ②ポストイットを回収員に渡す	橋から、口頭で簡潔に自助の必要性を説明する。（阪神大震災における調査結果引用）
	あらかじめ班を指定して着席してもらう（10班程度を予定） 班数は8班であった（参加者は100名）。	U氏より 三重県救助ヘリの活動実態や、被災時に離島暮らし住民がヘリ救助してもらうためのポイント等について講演があった（25分間）。	●総合ファシリテーター：南部、橋前：橋体制で進めることを述べる ●各班の班長（代表）を決める				2. 回収されたポストイットを倉原、森本、橋によって模造紙上に分類、整理。倉原から全体に傾向を報告。	
役割	●挨拶：南部 ●受付：鳥羽市S氏、自主防のS氏外1名	●プレゼンター：南部 ●プレゼンター：U氏	●プレゼンター：南部、M地区S氏	●プレゼンター：南部 ●板書：橋	●プレゼンター：南部、RISTEX古屋様	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：南部、倉原 ●補助者：橋、森本	●プレゼンター：橋
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本
ツール	●M地区の地図10班分 8班であった		●スタッフ名札	※高齢者が多いのでパワーポイントなどは使われないで、南部からの口頭説明とする。		●高齢者三種の神器入れ実物	●ポストイット大、 ●セッションペーパー、ボールペン。 ●模造紙	※高齢者が多いのでパワーポイントなどは使われないで、南部からの口頭説明とする。
場所	鳥羽市M地区コミュニティセンター大広間							

表 1 1 : 鳥羽市M地区（離島地区）での基本LODEの実実施手順（その2）

作業8	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15
作業10で説明	6	7	8	9	省略	11	18
4	5	25	10	10	10	4	12
19:46～19:50	19:50～19:55	19:55～20:20	20:20～20:30	20:30～20:40	20:40～20:50	20:50～20:55	20:55～21:00
作業10で説明	19:47～19:50	19:50～20:05	20:05～20:37	20:37～20:58		21:01～21:03	20:58～21:01
共助と要援護者について	桃取地区の図上ワークショップ					結び	
プレゼン：主な「支援を必要とする方々」	プレゼン：LODE図上WS作業手順	作業：要援護者や全住民の所在を凡例シールによって示す作業	作業：要援護者各人の状況に関する情報収集作業	作業：「図上避難シミュレーション」夜	作業：「図上避難シミュレーション」昼	本日の評価と課題	まとめと講評
要支援者に関する参加者の理解を促す。	図上作業の手順に関して理解を促す。	参加者各自に「自分の近所にいる要援護者」を認識してもらうとともに、全住民が「夜だけ住民」か「昼も夜もいる住民」かを区別してもらう。	住民同士の密な結びつきをいかして、要援護者のより詳細な情報を提供してもらい、地区自主防組織の要援護者台帳更新に役立てる。	夜間発災時の避難シミュレーションを通して、要援護者への支援・配慮（要援護者のタイプによって求められる支援・配慮）のあり方を認識してもらう。	平日日中発災時の避難シミュレーションを通して、要援護者への支援・配慮（要援護者のタイプによって求められる支援・配慮）のあり方を認識してもらう。	本日の評価と課題について、ポストイットにより、参加者の声を拾う。	参加者に、外観の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう。
要支援者に関する参加者の理解	LODEワークショップの基本的手順に関する参加者の理解	要援護者だけでなく各地区の住民情報、及び参加者の要援護者情報表示方法の習熟	各要援護者の状況を記したポストイット（その後、自主防が「要援護者台帳」を更新する際の参考資料に利用）	夜間の避難シミュレーションを通して得られる、要援護者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方に対する参加者の認識	平日昼間の避難シミュレーションを通して得られる、要援護者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方に対する参加者の認識	参加者の本日成果と課題の共有	参加者の今後への意識
全体	全体	世古（集落）別の班（1～10班） 1～8班	世古（集落）別の班（1～10班） 1～8班	世古（集落）別の班（1～10班） 1～8班	世古（集落）別の班（1～10班） 1～8班	全体	全体
プレゼン	プレゼン 作業	作業：凡例に従って年代シール・要援護者シールを貼っていく	作業：各班作業でリストアップされた要援護者一人一人の状況（保護を必要とする状況や寝ている場所など）をポストイット（1人1枚）に記入してもらう。	作業：地産発生、その後津波発災の与件発表の下、図上で各自行動及び班単位での役割分担シミュレーションを行う。	作業：地産発生、その後津波発災の与件発表の下、図上で各自行動及び班単位での役割分担シミュレーションを行う。	ポストイット作業：「本日の感想（良かったところや反省点）」について	プレゼン
横からシール凡例表に従って説明 ①子ども：Lについて説明 ・ADHDタイプやASDタイプも ②高齢者 ・認知症について ③障害者：Dについて説明 ・身体（内部や重度含む） ・知的（重度心身含む）や精神（てんかん含む）	横から、 ①図上作業手順について説明する。 ②再度要援護者等の凡例を説明する。 横からではなく、まず南部から「図上に自宅シールを貼る」という作業指示から開始となった。	【年代】 ①乳幼児：オレンジ丸 ②未成年者：黄色丸 ③小学生：水色丸 ④中高生：青色丸 ⑤後期高齢者：赤丸 ⑥超後期高齢者：ピンク丸 ⑦経年間の大人（19～74）：緑 ⑧寂しい大人（19～74）：星 【要援護者】 a 身体的支援：銀色丸 b コミュニケーション支援：金色丸	会話が活発で賑やかであったため、個別支援計画表設計ではなく、集落全体での高齢者・要援護者鑑別を実施するための集計作業を行った。	①コーディネーターから発災時の与件を発表する（日時、地産規模、天候、火災や津波の発生など）。 ②それに対してグループ単位で、各自の行動やグループでの役割分担を踏まえて避難行動を検討する。	①コーディネーターから発災時の与件を発表する（日時、地産規模、天候、火災や津波の発生など）。 ②それに対してグループ単位で、各自の行動やグループでの役割分担を踏まえて避難行動を検討する。 時間の関係上、今回は「夜の避難」の検討だけにした。	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「本日の感想は？」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	南部及び自原先生、さらに自主防の代表から簡単な講評を発表してもらう
	凡例表と凡例シールを各班に配った。			③班別にリーダーから作業結果を報告してもらう	③班別にリーダーから作業結果を報告してもらう		離島地区がステージとなった。絵本『津波が来るぞ逃げやなあかん』も紹介された。自主防組織に寄贈された。
	各班の中で一番若い人をリーダーにした。			④グループ発表を受けて、コーディネーターや講師がコメントする。	④グループ発表を受けて、コーディネーターや講師がコメントする。		
●プレゼンター：横	●プレゼンター：横 ●プレゼンター：南部	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：横 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役にお願ひ）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：横 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役にお願ひ）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：横 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役にお願ひ）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：横 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役にお願ひ）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：横 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役にお願ひ）	●講評者：南部さん ●講評者：自主防代表
倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本
●全員に凡例表（200枚）	●凡例表シート（各人1枚） ●M地区地図（各班分の枚数） ●自宅シール（各人1枚）	●凡例表シート（各人1枚） ●M地区地図（各班分の枚数） ●凡例シール各冊（各班分）	●M地区地図（各班分の枚数） ●ポストイット（各派、要援護者の人数分以上の枚数） ●ラッパペン	●作業10を経た地域図（10班分）→+8班 ●上掛けフィルムシート（10班分）→+8班 ●凡例シール各冊 ●凡例表シート（各人1枚） ●マジックペン	●作業10、11を経た地域図（10班分）→+8班 ●上掛けフィルムシート（10班分）→+8班 ●凡例シール各冊 ●凡例表シート（各人1枚） ●マジックペン	●ラッパペン ●ポストイット（高齢者が多いため細かい作業が負担になる。良かったところと反省点に分けず、感想を書いてもらう）	●絵本『津波が来るぞ逃げやなあかん』

鳥羽市M地区コミュニティセンター大広間

(3) 子どもLODE

①兵庫県伊丹市A地区（小学校授業でのLODE研修）

a) 対象コミュニティ

- ・ 小学校児童（4年生学年全員120人）。

b) 実施前の状況と経緯

- ・ 小学校区の民生委員や自治会リーダー、まちづくり協議会役員等に加え、社会福祉協議会、市役所担当課が参画して組織する団体「地域福祉ネット会議」では、平成27年度1月・2月に開催した校区全域対象のLODE研修会（合計200名以上参加）に引き続き、LODEを子どもに普及させるために、学校を巻き込んだ取り組みを企図していた。
- ・ かねてよりネット会議の防災福祉活動に大きな理解を示していた小学校校長から、「4年生で1時限のコマであれば防災授業に使うことが可能」という提案を受け、平成28年7月から毎月「小学校子どもLODE」実施企画会議を重ねてきた。

c) 子どもLODE実施の狙い

- ・ 子どもを徐々に引き込んでいくためには、毎年小学校の授業で取り入れられれば理想的である。
- ・ その後子どもから親世代（PTAなど）へと波及していくことができれば、自治会のLODEに参加しない世代を引き込むことができる可能性がある。

d) 小学校での子どもLODE実施企画のポイント

- ・ 45分間という短い時間であるが、今の子どもの集中力は長時間持続しないので、この程度の短い時間でプログラムを作る方がベターではないかという考えのもと企画検討を重ねた。
- ・ 集中力持続のためには、子どもの関心を引きつける工夫が不可欠であるため、クイズ形式を取り入れることとする。
- ・ 同様に、今の子どもは会話によるコミュニケーション力が昔の子どもと比べて劣っているのではないかとと思われる（兵庫県小学校教師からのアドバイス）。そこで、プログラムの初期に映像を取り入れることで理解を促す工夫を施すこととした。
- ・ 子どもたちの関心を引きつけることができた場合は、1対1のインタビューや質問形式を導入して、子どもたちに大人と会話（生のやりとり）させる。これによって会話によるコミュニケーションの大切さを少しでも感じてもらう。
- ・ 対象が小学校4年生であることから、複雑な地図読みを求められる難易度の高い図上作業は難しい。そこで、「地図に関心を持ってもらう」や「自宅や学校などの位置を図上でわかるようになる」というところに図上作業の目標を置いた（下げた）。

e) 実際の実施内容と実施体制

- 参加者数：子ども129名
- 実施内容と結果
24頁の表12に示す。
- 観察調査等からの考察
 - ・ 45分（若干オーバーして50分）という短い時間の中で効率的に進めることができた。
 - ・ つまらなさそうにしている子どもや手持ち無沙汰な子どもの姿はほとんど目に入らなかったことから、映像メニューやクイズを導入したことは正解といえるだろう。

- ・ これらのことは、後に報告する広島市安佐北区の事例でも同様な傾向がうかがえることから、「子どもLODE短時間プログラム」として有効な進め方になると考えられる。
- ・ 子どもたちの事後アンケートでは、「これから、このような地域の行事があれば参加したいですか?」という質問に対し129名中80名(約62%)が「はい」と答えていることから、子どもたちにも概ね好評であったと思われる。
- ・ 当日の総合ファシリテーターを務めた地域福祉ネット会議副委員長であり民生委員のF氏は、平成25年9月に初めて南部美智代がコーディネートする防災ワークショップに参加して学んだが、以来2年半、南部のワークショップに数回参加し、その後28年1月・2月にA地区の「つなぎLODE」の総合ファシリテーターを務めた。今回は、他のネット会議メンバーや社協職員も絶賛するほどの絶妙な仕事ぶりであったことから、LODEファシリテーター(総合ファシリテーター)・普及者の育成には2～3年は必要になるとと思われる。

● 現場写真



写真24・25・26 (災害の映像や、絵パネルなどの利用でわかりやすく工夫)



写真27・28・29 (クイズ形式、絵パネルのヒントで活発な回答を引き出す)



写真30・31・32 (地図ワークは、4年生でもわかるように易しい内容で実施)

表 12：伊丹市 A 小学校授業での子ども LODE（短時間モデル）の実施手順

[illegible]

②広島市安佐北区F地区（子育て支援の場でのLODE研修）

a) 対象コミュニティ

- ・ 私立のZ寺幼稚園が毎月一度開催する「土曜学校」に参加する小学校児童（低学年～高学年まで約20名）。

b) 実施前の状況と経緯、及び子どもLODE実施の狙い

- ・ A区は平成26年の広島豪雨災害の被災地のひとつである。今回の研修会の会場となった寺は、やや高台に位置するものの、昔から境内に洪水時避難用の船を置いていた歴史をもつ。
- ・ この地域で育つ子どもたちに、防災教育が必要と考えた住職（幼稚園長）から相談を受け、子どもLODEを開催することとした。

c) 子どもLODE実施企画のポイント

- ・ 土曜学校が60分間という短い時間での定期開催であることから、1回あたり60分を厳守し、12月と2月の2回実施することとした。
- ・ 12月は南部の「高齢者三種の神器箱」づくりという制作体験メニューを中心として実施することとした。
- ・ 2回目の2月は、地図ワークに中心とすることとした。低学年の児童が少なくないことから、高度な地図ワークではなく、必要最低限の内容のものとした。
- ・ 今の子どもの集中力は長時間持続しないので、集中力持続のためには、子どもの関心を引きつける工夫が不可欠であるため、クイズ形式を取り入れることとする。
- ・ 同様に、今の子どもは会話によるコミュニケーション力が昔の子どもと比べて劣っているのではないかとと思われることから、プログラムの初期に映像を取り入れることで理解を促す工夫を施すこととした。

d) 実際の実施内容

【1回目：12月10日 午前9時～10時】

- 参加者数：子ども15名
- 体制：倉原、南部、橘、森本、大西の他、広島の協力者による体制。
- 実施内容と結果
 - ・ 変わる画像の防災クイズで導入（約12分間）
 - ・ 南部から東日本大震災と「貝殻雛」のお話（約10分間）
 - ・ 南部から「一番大事にしているものは」の質問と「高齢者三種の神器」の講話（約13分間）
 - ・ 南部の指導による「三種の神器入れを高齢者にプレゼントするときのメッセージカードづくり」（約10分間）
 - ・ 南部による防災絵本『津波が来るぞ、逃げやなあかん』の読み聞かせと絵本贈呈（約12分間）
- 観察調査等からの考察
 - ・ 画像を使ったクイズの時間は、子供達は活発であった。
 - ・ その後の南部のお話タイムでは、低学年が多いことからか、なかなか集中力が持続しない様子をうかがうことができた。飽きさせないように工夫しないと、大人の話を数分以上継続して聴くことは難しいようであった。

●現場写真



写真33・34（寺の本堂での開催）

写真35・36（高齢者にプレゼントする三種の神器箱にメッセージを貼付け）

【2回目：2月11日午前9時～10時】

- 参加者数：子ども15名
- 体制：倉原、橘、森本、大西の他、広島の協力者による体制（南部不在）。
- 前回と異なる工夫
 - ・クイズ形式、質問形式以外で、長い時間（数分以上）話を聞かせるのは難しいと考え、短時間で目先が変わるメニューとした。
- 実施内容と結果
 - 27頁の表13に示す。
- 観察調査等からの考察（倉原、橘、森本、大西、幼稚園長による反省会での意見）
 - ・前回より、子どもたちを引きつけることができたと思われる。
 - ・小学生の場合、1回2時間以上の長時間プログラムよりも、短時間の取り組みを継続して重ねる方が、取組みやすのではないかと考えられる。
 - ・今回のやり式であれば、南部でなくともコーディネートができるのではないかと。

●現場写真



写真37・38（新聞スリッパづくり）

写真39（茂木健一郎博士のアハクイズ形式に防災クイズを加えた新しいクイズは子供達に好評）



写真40・41（シールを貼る面白さからか、図上作業にも夢中になる）

表 13 : 広島市A区での子どもLODE（短時間モデル）の実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6
実際順番	1	3	2	4	5	6
所要時間	10	10	5	3	5	7
時刻	9:00～9:10	9:10～9:20	9:20～9:30	11:55～11:58	11:58～12:03	12:03～12:10
実際時刻	09:00～09:09	9:20～9:36	9:09～9:20	9:36～9:42	9:42～9:46	09:46～10:00
カテ	導入		防災グッズづくり	地図ワーク	地図ワーク	地図ワーク
タイトル	開始合図 講師・世話役メンバー紹介	災害画像利用学習	新聞スリッパづくり	地図で自分の家を探す	クイズ「どうして善徳寺は安全なのか」	いざという時に立つ場所・機能
達成すべき目標	講師や世話役を知るとともに災害に対して関心を持たせることで、作業へのウォーミングアップを行う。	子供達を防災の内容に引き付けるために、災害画像を利用した防災クイズによる学習を行う。	手を動かす工作・制作ワークショップで、子供達の集中力を持続させる。	小学校低学年の子供たちにも最低限地図に上で「自宅の場所」を探せるようにする。	会場である善徳寺は、昔から河川氾濫、土砂災害両面において安全な場所と言われる。その安全性を地図上からも理解させる。	地域の中で、医療機関や公衆電話、水や土砂に強い避難場所（指定にこだわらない）の場所を意識させる、覚えさせる。
生成物	防災の取組に向けて作業しやすい雰囲気	子供達の災害や防災に対する関心の高まり。	新聞スリッパ、子供達の避難所の生活に対する想像や意識。	子供たちが「地図上で自宅の場所がわかる」ようになること。及びシールを貼った地図。	子供達の「当該地域における安全な土地とは？」の認識。及びシールを貼った地図。	子供達の「当該地域における安全な土地とは？」や「万一の時に身を守れそうな場所」に対する意識。及びシールを貼った地図。
作業単位	全体	全体	全体	グループ別 (1班・2班)	グループ別 (1班・2班)	グループ別 (1班・2班)
	プレゼンと質問	パワポ画像による 防災クイズ	作業	図上作業と質問	図上作業と質問	図上作業と質問
進め方	1. 挨拶 2. 講師メンバーを紹介 ①司会：橋 ②講師：倉原、森本 ③記録その他：大西他 3. 質問 ・東日本大震災について ・阪神淡路大震災について ・広島土砂災害について等 実施にはメンバー紹介の中を、「東日本大震災ってどこで起こったの？（倉原）」とか「阪神大震災の阪神って何県？（森本）」、さらには「いなむらの火という物語は知ってる？（橋）」のように質問を織り交ぜながら進めた。	1. 茂木健一郎氏提唱の『アハクイズ』式に災害映像クイズの画像（変化する画像）をみせる。 ・津波画像、地震画像（室内）、土砂災害画像 2. その後子供達に画像のどこが変わったかの質問を投げかける。 3. その画像にふさわしい防災クイズを出す ・津波の時はどうするの？ ・突然地震が起こったらどうする？ スクリーンの準備が遅れたため、このメニューを手順2の前に実施したが、子供達の関心をすぐに引きつけることができた。	1. 寒い避難所役に立つ『新聞スリッパ』作りを行う。 スクリーンの準備が遅れたため、このメニューを手順2の前に実施したが、子供達の関心をすぐに引きつけることができた。	1. 貼り合わせた住宅地図の上で、自宅の場所に星印のシールを貼らせる。 低学年の子供が過半数のため、時間を要したが、上級生が指導した。	1. 次のように進める。 ①子供達に質問する。「Z寺の場所にあるかわかりますか？緑のシールを貼ってください」 ②子供達に挙手させて口々に回答を言わせる。 ③子供達に質問する。「なぜZ寺は安全なのか？」 ④子供達に挙手させて口々に回答を言わせる。 ⑤地図上で、土砂災害に巻き込まれない位置であることを確認させる。敷地が堤防より低くないことを理解させる。 指定避難場所のスポーツセンターが、洪水時には安全ではないことが判明した。	1. 次のように進める。 ①「公衆電話の場所知ってる？」→青いシールを貼らせる。 ②なぜ公衆電話が大事かと、災害伝言ダイヤルの掛け方を教える。 ③「医療機関や薬局さんの場所知ってる？」→赤いシール。 ④「Z寺のほか安全な場所は？」→緑のシール。 2. 他方の班と情報交換する時間を設ける。
役割	●プレゼンター：橋	●プレゼンター：橋 ●画像操作：谷口	●プレゼンター：森本 ●プレゼン補助：倉原	●プレゼンター：橋 ●テーブル補助：森本、谷口	●プレゼンター：橋 ●テーブル補助：森本、谷口	●プレゼンター：橋 ●テーブル補助：森本、谷口
観察	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール		●ノートパソコン、プロジェクター ●変化する画像（パワポ）	●人数分の古新聞	●区深川のうちZ寺周辺部分の住宅地図（各班分） ●凡例シール	●区深川のうちZ寺周辺部分の住宅地図（各班分） ●凡例シール	●区深川のうちZ寺周辺部分の住宅地図（各班分） ●凡例シール
場所	区Z寺					

③鳥羽市M地区集落全体（3月11日実施：郡部離島地区）

a) 対象コミュニティ

- ・（2）の④で「基本LODE」を実施した鳥羽市M地区（離島集落、人口630人、高齢化率45%）の子どもが対象。
- ・昨年度小学校が閉校になるなど、少子化が顕著で、小中学生全員でも20名に足りない。
- ・このように超高齢化が進む島にあって、小中学生はもはや「守られる対象」ではなく、「高齢者を支援するための貢献」を求められるか、そうではなくとも「自分の身は自分で守れる子ども」であることが求められている。

b) 今回の子どもLODE実施の狙い

- ・3月11日の夜間に大人対象の大規模研修会を実施する予定である。この大研修会に先駆け、かつ成果を引き継げる形で、同日昼間に子どもLODEを開催し、「集落ぐるみで防災活動の再活性化」の契機とする。

d) 実際の実施内容

- 参加者数 子ども14名（中学生3名を含む）

●実施内容

- ・次頁以降の表10・11に3月11日研修の内容を整理する。
- ・伊丹市や広島市のような1時間程度の短時間の取組みではなく、長時間モデルともいべき3時間以上のものとなった。これはフィールドワークを実施したからである。

●現場写真



写真41（コミセンに集合）



写真42・43（2人1組の班で高齢者宅訪問インタビュー調査）



写真44（フィールドワークから戻って整理作業をします）



写真45（整理した結果を地図上にシールを貼って図示する作業）



写真46（調査結果図）



写真47（調査結果集計作業）

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

表14：鳥羽市M地区での子どもLODE（長時間モデル）の実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7
実際順番	1	2	3	4	5	6	7
所要時間	5	10	25	80	15	20	10
時刻	13:00～13:05	13:05～13:15	13:15～13:40	13:40～15:00	15:00～15:15	15:15～15:35	15:35～15:45
実際時刻	13:03～13:08	13:08～13:23	13:23～13:45	13:45～15:00	15:00～15:48	15:48～16:00	16:05～16:41
カテ	導入	本日のミッション説明と作業班分け	出発準備	フィールドワーク調査	休憩	整理・集計作業	まとめ
タイトル	開始合図 講師・世話役メンバー紹介	本日のミッション説明と作業班分け	トランシーバー取扱い説明	高齢者宅を訪問してヒアリング調査	休憩	整理・集計作業	まとめ
達成すべき目標	講師や世話役を知るとともに災害に対して関心を持たせることで、作業へのフォーミングアップを行う。	子供達に本日の仕事の内容と、意識させる。その実施体制を決める。	フィールドワークに使用するトランシーバーの使い方をおぼえさせる。	子供達にお年寄りを戸別訪問させて、聞き取り調査をさせる。子供達のお年寄りに対するコミュニケーション能力を高める。	後半の整理作業に向けて休憩をとり、集中力を回復させる。	フィールド調査の結果を整理集計し、その状況子供達に定着させる。	まとめることによって、子供達の頭の中に、本日の記憶を残し、定着へと繋げる。
生成物	防災の取組みに向けて作業しやすい雰囲気	子供達のミッション遂行意識	子供達のトランシーバー取扱い技術	子供達が調査したお年寄りに関する調査結果。	子供達の集中力の回復。	シールを貼って高齢者状況を整理した地図と、全体の集計表。	子供達の中に残る本日の記憶。
作業単位	全体	全体	全体	グループ別（1班～6班）	全体	全体	全体
進め方	プレゼンと質問 1. 南部様へ 2. メンバーを紹介 ①災害VNR鈴鹿（伊藤、小西） ②県外（倉原、橋、森本、大西） ③学識者（古屋氏） ④その他（市役所Y氏） ⑤特別（三重県U氏）	プレゼン 1. 本日の仕事はフィールドワーク調査 ①高齢者三種の神器箱をお年寄りに訪問して渡す ②家族構成や災害時避難行動の質問調査を行う（家族人数、どこへ逃げるか、なぜ逃げないか等） ③訪問先をバイナダーの地図に記録 2. 班分け作業 ・中学生（または小学校高学年）＋小学生の2人体制に大人が付き添う。 ・北世古、中世古、南世古、清水世古、東世古A、東世古Bの6班	プレゼン作業 1. 災害VNR鈴鹿の伊藤さんからトランシーバーの使い方を説明 トランシーバーという道具は子供達の関心をすぐに引きつけることができた。	フィールドワーク調査 1. 1班あたり20軒程度の訪問調査（高齢者宅）を行った。それぞれの戸口で次の内容を高齢者に聞き取り調査する。 ①今日訪問した理由（調査） ②三種の神器箱の説明と手渡しプレゼン ③質問・家族構成・地震・津波の際の避難行動や避難先・行動の理由 中学生や上級生が会話をリードしながらも、小学生にもできるところを分担させていた。6班合計で108人の高齢者宅を調査した（集落の高齢者の4割）。	おやつが終了後、小学校グラウンドで、三重県U氏による「ドローンの操作・飛行」が行われた。 ドローンと一緒に集合写真を撮影した。	図上整理作業と集計作業 1. 次のように進める。 ①自分の家には地図上に星印シールを貼る。 ②訪問先（おばあさん）には地図上に紫色シールを貼る。 ③訪問先（おじいさん）には地図上に紫色シールを貼る。 2. 赤いシール、紫色シールの数をカウントして、その数値を全体に向けて発表・報告する。 3. 全体集計シートをホワイトボードに整理する。	プレゼン 倉原、南部、古屋さんからの講評 子供達から郷土芸能の太鼓披露があった。 三重県U氏からヘリコプターによる救助活動やドローンの災害時利用などについて講演があった。
役割	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：南部 ●補助：橋	●プレゼンター：伊藤 ●補助者：小西、南部	●調査同行・安全確保：大人が一人ずつ	●プレゼンター：U氏	●プレゼンター：南部 ●補助：橋	●プレゼンター：南部、倉原、U氏
観察	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール		●高齢者に配布する「高齢者三種の神器箱」	●人数分のトランシーバー	●人数分のトランシーバー ●班に1部ずつバイナダー ●高齢者三種の神器箱（1班あたり20箱まで）	●ドローン	●集落の地図 ●シール（赤、紫） ●ホワイトボード	
場所	鳥羽市M地区コミュニティセンター						

(4) 育成LODE

①鈴鹿市（災害ボランティア対象）

a) 対象コミュニティ

- ・主として鈴鹿市内の災害ボランティア。

b) 実施前の状況とLODE実施の狙い

- ・これまで十数年間にわたって、南部等が育成してきた災害ボランティア人材が存在するが、この人材をより福祉的な認識・意識を備えたLODE普及者へと成長を促す目的で「育成LODE」を実施することとなった。

c) 実施の経緯

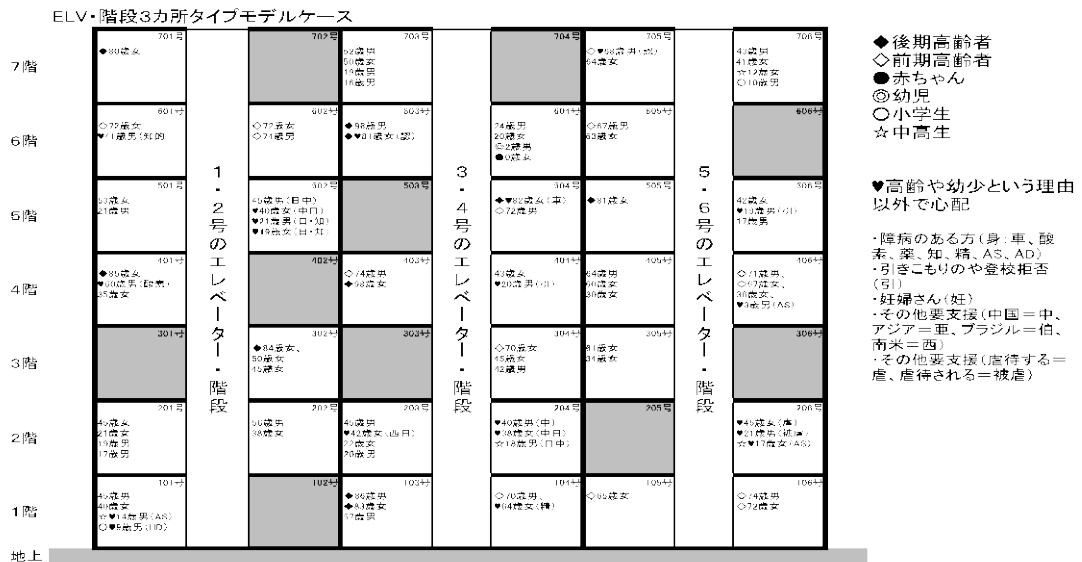
- ・特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿からの呼びかけ・募集。

d) 実際の実施内容と実施体制

【育成LODEワークショップ（6月3日実施）】

- 参加者数と参加者層：43名（うち行政2名、市議4名、メディア2名を含む）
- 実施内容と結果
 - ・31頁及び32頁の表15・16に示す。
 - ・なお、今回の育成LODEでは、様々な地域からの参加者のため、特定の地域やマンションをステージにした図上ワークショップを行うことはさほど意味を持たないと判断し、「仮想のマンションコミュニティ（次図4参照）」を作成し、使用した。この仮想コミュニティは、全国平均から見て高齢者の比率や要援護者の比率などをやや高めに設定したが、「ヘルパー初任者研修レベルの福祉知識」を目安に設定・作成した。

図4：育成LODEで使用した仮想コミュニティ図



● 参加者意見による考察

- ・「良かったところ」と「課題点」の参加者アンケート結果を表17に示す。
- ・とりわけマンションでの防災問題と障害者など要援護者に関してより知りたいという関心の高さをうかがうことができる。

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

表15：鈴鹿市での育成LODEの実施手順（その1）

順序	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8	作業9
実際順番	1	3	2, 4, 15	2, 4	5	6	7	8	9
所要時間	30	3	3	3	2	12	3	1	5
時刻	18:30～19:00	19:00～19:03	19:03～19:06	19:06～19:09	19:09～19:11	19:11～19:23	19:23～19:26	19:26～19:27	19:27～19:32
実施時刻	18:00～18:40	18:40～18:44	18:35～20:57	18:40～19:00	18:53～19:56	19:00～19:06	19:08～19:17	19:17～19:21	19:21～19:29
力ず	受付	導入				自助について		共助と要援護者について	
タイトル	受付・雰囲気作り	挨拶 阪神大震災からDIGへ そして今、LODEへ	プロジェクトメンバー紹介 参加者紹介	LODEとは 育成LODEとは	今回のRISTEXの研究開発プロジェクトについて	作業：あなたにとって「自助」とは？ 19:03	プレゼン：「高齢者三種の神器、他」 19:11～	プレゼン：なぜ「共助」は必要か？	プレゼン：主な「支援」を必要とする方々
達成すべき目標	参加者の緊張をほぐすために参加しやすい雰囲気を出す。	防災のためのDIGからLODEへの流れの意義・意味を理解してもらう。	プロジェクトメンバーや参加者を知り、作業へのウォーミングアップを行う。	・LODEが重視する「要援護者の情報と支援」の重要性を理解してもらう。 ・普及者育成LODEの意義を理解してもらう。	当研究開発事業に対する参加者の理解・認識を促す。	参加者にまず「自助」とは「何を考えようか」という結果を全体で整理し、全員で共有する。	自助の考え方の一例を学んでもらう。要援護者の生命の危険やQOL低下につながるかわからない事態の一例を学ぶ。	共助の必要に関する参加者の理解を促す。	要支援者に関する参加者の理解を促す。
生成物	和やかで参加しやすい雰囲気	参加者のやる気とLODEに対する理解	作業しやすい雰囲気	・要援護者対応を重視したLODEに対する参加者の初期的理解・普及者育成プログラムに対する参加者の理解(18:57～19:00)	RISTEX研究開発事業及びLODEに対する参加者の理解・認識(背景理解)	参加者たちの「自助」意識を記したポストイット	要援護者支援の考え方に関する参加住民の理解・認識	共助の必要に関する参加住民の理解	要支援者に関する参加者の理解
作業単位	各人（水場順）	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
進め方	参加者の受付時に、講師側が挨拶し、一声ずつ声をかけし、和やかな雰囲気を創る。 その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を差し込んでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	前部美智代から次のような内容の説明 ①阪神大震災後DIGを発案した経緯 ②さらにLODEを発案した経緯 ③LODEはLOVEをもって行うこと	LODEプロジェクトメンバーを紹介する ②プロジェクト代表倉原先生 ③研究メンバー：延藤先生 ④研究メンバー：橋、大西、藤本 ⑤RISTEX、避難センター長様、古屋様 参加者を紹介する ⑥DVN協賛メンバー ⑦鈴鹿市協賛関係者 ⑧総務や民間の方々 ⑨名古屋の方々 ⑩その他のの方々		古屋様に口頭でご説明いただく	1. 前部美智代から次のような作業指示 ①「自助と聞いてあなたは何を想起するか」を3分以内にポストイットに書く （ポストイットは横断に色分け配布） ②ポストイットを回収員に渡す	前部美智代から「高齢者三種の神器入れ」や「乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾」などのグッズを数個、説明する	橋から、口頭で簡潔に共助の必要性を説明する。（阪神大震災における調査結果引用）	原野センターN所長から説明 ①子ども：Lについて説明 ・ADHDタイプ ・ASDタイプ ・LDなど ・その他 ②障害者：Dについて説明 ・身体（内部や重度含む） ・知的（重度心身含む） ・精神（てんかん含む） ・ヘルプホームの通所者たち
	あらかじめテーブルを指定して寄席してもらう(4班を予定)		●総合ファシリテーター：南部、補助：橋林制で進めることを述べる ●各班の班長（代表）を決める			2. 回収されたポストイットを倉原、橋によって横断路上に分注、整理。全体に傾向を報告。19:06			橋からその他の要援護者について補足（高齢者）
役割	●挨拶：南部 ●補助：橋 ●受付：大西、藤本 ※総合司会役はスタート時、南部、メンバー紹介後は橋の予定	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：南部、橋	●プレゼンター：RISTEX古屋様	●プレゼンター：南部 ●補助者：倉原 ●補助者：橋	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：橋	●プレゼンター：鈴鹿市療育センターN所長 ●補助：橋
観察	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤
記録	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本
ツール	●受付名簿 ●名札（スタッフ、参加者） ●お茶とお菓子 ●軽食		●スタッフ名札 ●参加者名札	●LODEロゴ拡大印刷物 ●LODEの種別一覧表 ●育成LODEのプログラム予定表		●ポストイット大、ボールペン、横断紙 ●高齢者三種の神器入れ実物 ●乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾実物	●資料：「共助の必要性」共助の必要性を示す調査結果（阪神大震災時の調査結果）	●資料：「要援護者の説明」	
場所	鈴鹿市社会福祉センター 2階会議室								

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

表 16：鈴鹿市での育成LODEの実施手順（その2）

順番	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15	作業16	作業17	作業18
実施順番	10	11	12	13	14	15	16	17	18
所要時間	3	17	5	15	15	15	4	12	2
時刻	19:32～19:35	19:35～19:52	19:52～19:57	19:57～20:12	20:12～20:27	20:27～20:42	20:42～20:46	20:46～20:58	20:58～21:00
実施時刻	19:30～19:35	19:35～19:50	19:50～	～20:11	20:11～20:32	20:32～20:42	20:42～20:51	20:51～21:02	～21:05終了
カテ	緊急的私設の福祉避難所を探す		マンションタイプの図上ワークショップ				結び		
タイトル	プレゼン・私設福祉避難所の必要性について	班別作業：私設福祉避難所候補を探す	プレゼン：仮想マンションLODE図上作業手順	作業：要援護者の所在を凡例シールによって示す作業	作業：「図上避難シミュレーション」	作業：「6年後LODE」図上作業	本日の評価と課題	まとめと講評	アンケート
達成すべき目標	既存施設を再指定するスタイルの福祉避難所では絶対的不足があることを理解してもらう。	指定避難所や医療・福祉施設の立地状況等を判断しながら私設福祉避難所の候補地を見つけ出す訓練を行う。	仮想マンション図を用いた育成LODEワークショップの手順に準じて理解を促す。	仮想コミュニティでの学習で、参加者各自に「自分の近所にいるかもしれない要援護者」を認識してもらう。	避難シミュレーションを通して、要援護者への支援・配慮（要援護者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方を認識してもらう。	作業13で作成したコミュニティ図が、5年後にどのように変化するかを図上予想してもらうことで、コミュニティの潜在的脆弱性と可能性を認識してもらう。	本日の評価と課題について、ポストイットにより、参加者の声を拾う。	参加者に、外側の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう。	今回参画への感謝と今後の継続的参加を依頼するとともに、本日の評価・課題指摘の意見をアンケート調査を行う。
生成物	私設福祉避難所の必要性に関する参加者の理解	私設福祉避難所の設置環境条件に関する参加者の理解（中でも御園町地区は、地区の環境条件に対する理解も）	仮想マンション図を用いたLODEワークショップの基本的手順に関する参加者の理解	参加者の要援護者情報表示・整理方法の習熟（立面シール図）	避難シミュレーションを通して得られる、要援護者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方に対する参加者の認識	5年後のコミュニティにおける要援護者及び支援者候補等の情報図（立面戸書図）	参加者の本日常果と課題の共有	参加者の次回への巨諒	今後の参加への巨諒とアンケート結果
作業単位	全体	テーブル別グループ（1～4班）	全体	テーブル別グループ（1～4班）	テーブル別グループ（1～4班）	テーブル別グループ（1～4班）	全体	全体	全体
進め方	プレゼン	作業：私設福祉避難所候補を探し、4班のなかで、要援護者情報を収集しながら私設福祉避難所候補地を探す。	プレゼン	作業：書き留めた要援護者情報をもとに、凡例に従って要援護者シールを貼っていく	作業：地震発生、その後火災及び津波発生に伴う発生時の下、図上で各自行動及び避難単位での役割分担シミュレーションを行う。	作業：作業13の成果図を下図にして、「本日の良かったところと反省点」について	ポストイット作業：「本日の良かったところと反省点」について	プレゼン	プレゼン
	教育センターN所長から、大規模震災時に、鈴鹿市内の災害者がどのような状況に置かれるかを説明してもらう。 そのために、指定福祉避難所の不足を補う、臨時私設の福祉避難所や、専門家を補佐し、専門家に任せることができる“地域の理解者”を要請する必要があることを説明してもらう。	1.1～3班は、指定避難所や医療・福祉施設の立地状況等を判断しながら私設福祉避難所の候補地を見つけ出す 各御園町地区の4班は、地区の要援護者情報を収集した（シールを貼った）後、指定避難所や医療・福祉施設の立地状況等を判断しながら私設福祉避難所の候補地を見つけ出す。 3.1～3班が時間を余した場合は、御園町地区の作業を見学する。	横から、①図上作業手順について説明する。②要援護者等の凡例を説明する。③仮想コミュニティの要援護者情報を知らせる（各班記録）	①自宅・家の★ ②幼児児、オレンジ ③未就学児、大きい黄色丸 ④小学生、小さい黄色丸 ⑤中学生、水色丸 ⑥前期高齢者（男女別）：小さい赤丸と青丸 ⑦後期高齢者（男女別）：大きい赤丸と青丸 ⑧特に配慮や支援が必要な人、ハート	①コーディネーターから発表する（日時、地震規模、火災、津波の発生など） ②それに対してグループ単位で、各自の行動やグループでの役割分担を踏まえ避難行動を検討する。	①作業13の図の上にビニールシートをかぶせる。 ②5年後にタイムスリップ想定し、ゼニールシートの上から「変化の想定される方」のところに凡例を貼る。 ③その上で、避難シミュレーションを再考してみる。	とりわけ・福祉避難所候補探し・避難シミュレーション・6年後LODE等に関しての意見も聴く。	プロジェクトリーダー、プロジェクト協力者の2先生から簡単な講評を発表してもらう。	市部美智代から「お礼とアンケートのお願い、2色のポストイットに、「今日の良かったところ」と「今日の課題」を記入してもらった。」 協力者に「高齢者三種の神器入れ」のプレゼント
	南部と橋からもその補足説明を行うとともに、鈴鹿市の大半で想定される最大震度6強の説明を行う。	④班別にリーダーから作業結果を報告してもらう（19:42～19:45南部さん）		実際には凡例の説明作業とシール貼り作業を並行して行った。	③班別にリーダーから作業結果を報告してもらう（20:23～）	④班別にリーダーから作業結果を報告してもらう			
		⑤グループ発表を受けて、コーディネーターや講師がコメントする。			④グループ発表を受けて、コーディネーターや講師がコメントする。	④グループ発表を受けて、コーディネーターや講師がコメントする。			
役割	●プレゼンター：南部、鈴鹿市教育センターN所長 ●補助：橋		●プレゼンター：橋	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテータ 各班1名以上（災害ボランティアや社員職員にお願い）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテータ 各班1名以上（災害ボランティアや社員職員にお願い）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテータ 各班1名以上（災害ボランティアや社員職員にお願い）		●講師者：延原先生（20:55） ●講師者：JST岩瀬センター長（20:52） ●講師者：倉原先生（20:53）	●プレゼンター：南部
観察	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤
記録	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本
ツール	●資料「要援護者の説明」 ●最大震度予想図（各班A3～1枚）	●1班～3班の各テーブルに「鈴鹿市の中心部神戸地区」の地図 ●4班のテーブルには「鈴鹿市御園町地区」の地図 ●凡例シール（指定避難所、医療施設、福祉施設、薬局・店舗他、当該候補地など） ●要援護者凡例シール（高齢者、障害者、小学生、未就学児他）	●凡例表シート（各棟班に複数枚） ●仮想コミュニティの要援護者情報（コーディネーター手書き用戸別図）	●仮想マンション立面戸別図（4班分） ●凡例シール各種 ●凡例表シート（各棟班に複数枚）	●作業13を経た仮想マンション立面戸別図（4班分） ●マジックペンセット	●作業13を経た仮想マンション立面戸別図（4班分） ●上掛けフィルムシート（4班分） ●凡例シール各種 ●凡例表シート（各棟班に複数枚）	●ラッシュンペン ●ポストイット（2色）	●ホワイトボード	●アンケート用紙 ●高齢者三種の神器入れ（人数分） ●アンケート用紙ではなくポストイットを2色
場所	鈴鹿市社会福祉センター2階会議室								

表17：鈴鹿市での育成LODE（6月3日）参加者の感想・意見

No	班別	良かった点	課題だと思った点
1	青1	生活環境の変化に対応が変わる。	マンションのことの仕組み大切。 住民状況把握する必要性。
2	青2	マンションは横の部屋へベランダ壁を破って移動ができることを知って良かった。(町内にマンションが多いため)。	
3	青3	日頃からこのようなことを行うのは非常に大切だと思いました。	少し時間が足りませんでした。
4	青4	初めてこの企画に誘われ参加をした。いつ災害があるかわからないので、いい勉強になりました。 周りの方々は知らない方ばかりでした。 南部さんの話は以前聞きました。	
5	青5	防災の良い勉強になりました。	マンションの屋上は登れないのが多いと思います。
6	青6	マンション等の集合住宅では、さらに多くの課題がありそうだということがわかった。 自分の住まいに振り返って考えることができた。	
7	青7	以前にLODEの講義受講した時の復習にもなり、またメンバーが違うことで、いろいろな考え方があったことが少しわかりました。 回を重ねていくうちに視野を広げ、知識を吸収したいです。	マンションのみを考えると、現在はベトナムなども増えてきています。 時間が短すぎる。
8	青8	様々な立場の方と、ワイワイやりながら考えることができたのは良かった。	それぞれの立場の方が思いを持って話をするので、時間が足りないと思います。 事前に打ち合わせをしてポイントを絞って話をするのが大切！
9	青9	マンションでの住民達の避難シミュレーションをし、またその個人属性を仮定したのが良かった。 地域に生かしていきたい。	グループ内でのそれぞれの自己紹介の時間を取っても良かったのではないかな。
10	青10	発達障害のことがよくわかった。	5年後を見直すことができた。もう少し詳しく知りたい。
11	緑1	みんなで考えられたこと。 個人では問題意識が持てなかった。 大変参考になりました。	もう少し課題別整理できれば。
12	緑2	障害者、高齢者に対する考えが変わった。	災害マップ(シール貼り)の時間がかかりすぎ。
13	緑3	マンション例にて一つの地域全体を見ることができた。 仮想5年後を重ねて。	それぞれの地域の強み弱みを気づかせるヒントが欲しい。
14	緑4	一つのマンションを例に挙げての災害避難想定をしたことは、細かくて良かった(従来DIG、HUGは、場所想定であった)。	時間に追われて分かりにくかった。
15	緑5	LODEを初めて知りました。大変重要なことを考えさせられました。	なかなか、イメージがつかめず、高齢者ばかりの私たちの地域についても課題があると思いました。良かったです。
16	黄色1	近所との関係が平時より大事だと感じた。 一緒に逃げるにも、平時からどこを触って持ち上げていいかわからないことの情けなさを実感できた。 やっぱり、平時からの近所付き合いがめっちゃ大事やと感じた。	
17	黄色2	普段、障害者のことはあまり考える機会がなかったが、良い時間を与えていただいたと思う。 また、マンション全体みた時、各家庭いろいろな家族関係があり、それをも考えていなくてはいけないのだなと思いました。	
18	黄色3	いろいろな考え方の参加者がみえて、参考になりました。	回答はいくつもありあることを再認識しました。
19	黄色4	D：障害のある子供さん方に対する考え方、支援を一步深く知ることができた。	福祉避難所についてもう少し詳しくお聞きしたかった。
20	黄色5	何年も前から参加しているいろいろ知っているつもりでしたが、忘れていたこと、新しいこと等、いろいろ学んで、やっぱり生きていく間は勉強していきたいと思いました。 老人会にも働きかけようと思います。	
21	黄色6	福祉避難所の問題、今まであまり考えられなかった。	私たちの住んでいるところは、津波、水害の心配もないので、勧告を受けてもどこへ行くか。
22	黄色7	今までにやっていないゲームで、大変面白かった。 いろいろな新しい知識を持てたと思いますし、続けて参加して成果をあげたいと思う。	時間も関係しますが、内容が豊富すぎるので、もう少し少なくやってほしい。
23	桃色1	今までこのような研修を受講したことはありませんでしたが、とても良い勉強になりました。 園上の研修でしたが、冷静に行動するための課題の一つなので、これからもしっかり勉強していきたいと思っています。	
24	桃色2	5年後の姿が新しい発見でした。	マンションのイメージが湧かずに困った。
25	桃色3	皆、メンバーが良かったので、スムーズに勉強できた。 いろんな想定を考えるということ、今まで考えられなかったことが気付かされて良かった。私どもの地域でも、みんなで勉強したい。	
26	桃色4	・今までなかった体験ができて良かった。 ・多様な人が住んでいることと対応。 ・人は誰をとることの視点が良かった。	マンションの多様な方がいるのは良いが、もう少しシンプルの方が理解しやすいかも。
27	桃色5	マンションの5年後の話がためになった。	自分の地区のコミュニケーションの大切さ思った。
28	桃色6	・マンションでのLODEは是非必要 ・団地(平面団地)でもLODEは必要	年数の経ったマンションは今後住民に勉強会必要
29	桃色7	今回は以前と違って、いろいろと体験についてお話を聞かせていただき、ありがとうございました。以後の役に立ちたいと思います。	
30	桃色8	LODEの中に、障害の方、外国人の方、ベットのことがありました。	同じ班の方の自己紹介のようなのがあったら、他の方がどんな方なのか、少しわかったかなと思う。
31	桃色9	自分の地区でもやってみたいという気になりました。頑張ります。 療育センターN所長さん、ありがとうございます。ためになりました。	時間短いの、余分な話やジョークも多かったのでは。
32	桃色10	災害発生時に備え、様々なシミュレーションを取り組み、非常に有意義であった。 シールを貼る作業をした時、確かに住民関係(隣人関係)の希薄化を考慮していなかった。その意味では、また帰宅してから考えていきたい。	

●現場写真及び図表等 掲載者若干名、市役所2名、社協2名、報道2名



写真48（今回の凡例では要支援障害者を「身体」、「精神や知的」、「きになる子ども」の3つに大別した）



写真49（事前のテーブルセッティングの様子）



写真50（受付時に軽食を用意して雰囲気のを和らげる）



写真51（ポストイットワークの整理・発表）



写真52（療育センター所長が障害についてわかりやすくレクチャー）



写真53（仮想マンションコミュニティ図面による図上作業）



写真54（延藤先生によるまとめのファシリテーショングラフィックス）

【育成LODE勉強会（8月6日及び11月13日実施）】

- 参加者数と参加者層：11名（8月6日）及び17名（11月13日）
- 開催時間：8月6日13時～16時、11月13日9時～12時
- 実施概要と経緯
 - ・ 8月6日は、主に「子どもの理解」をテーマに勉強会を開催した（メイン講師は現役小学校教員の森本が務めた）。
 - ・ 11月13日は、「障害の理解」をテーマに勉強会を開催した（メイン講師は鈴鹿市療育センターN所長が務めた）。
 - ・ これらの開催は、6月3日のワークショップにおいて、N所長から受けた障害者・障害児に関する説明を、さらに深めたいと希望する参加者が複数いたことによる。
- 具体的な実施内容
 - ・ 11月13日に開催された勉強会は主に次のように進められた。
 - ・ まず、N所長から「障害児に向き合うための姿勢に関する10問クイズ」が出題され、その回答（考え方）を学ぶこととなった（表18参照）。

表18：障害児に向き合うための姿勢に関する10問クイズ
 （鈴鹿市療育センターN所長作）

中川所長からの「障害を理解するためのクイズ」

質問	回答	解説
1 言葉の出ない子にアニメやドラマなどのテレビやDVDをたくさん見せると言葉が出るようになると思うか？	No	テレビやDVDでは同じ音量で一方向的に出てくる。一方向的に語られる。返事してくれない。それが発達障害の原因の一つになる。脳の障害は治らない。治すのではなく寄り添うこと。
2 新しいことをたくさん経験させると言葉がたくさん出る。	No	出ない。少ない言葉なら覚えやすいし、使えるようになる可能性も高くなる。新しい言葉を大量に与えると、全く理解できない。
3 順番が守れない子には、まず座らせて、数を数えたりカードを見せると良い。	No	何歳になっても幼児のように順番がわからない子がいる。「まず座らせる」→落ち着けるか、安心できるかわからないので座らない。順番という概念が理解できない子どもは、そういう状況だということを理解してあげて欲しい。待たせるなら、「5（片手で済む）」まで数えさせる。「10（両手が必要）」までは待てない。
4 失敗を恐れずに、なんでもやらせてみて、自信をつけさせると良い。	No	初めての経験は不安。好奇心でやってみるが、失敗したら二度となくなる。それをさせようとした支援者のところには二度と行かなくなる。失敗しそうな場合には、直ちに場面を変えてあげる。
5 集団に入れると、周りの影響で自然に力がつき、成長につながる。	No	たくさんの情報が入りすぎると混乱する。療育センターは最大数人までの少人数クラス。音に敏感な子どもだと多くの声を聞き入れられない。最初はマンツーマンから、次第に2人、3人へと増やしてみる。
6 自分の気持ちをコントロールさせるのに、我慢させたり待たせたりすると良い。	No	片手で数えるまでしか待てない子に我慢はできない。
7 発達の気になる子の診断は医師しかできない。	Yes	「診断」は医師しかできない。
8 医師から診断が出たら、保護者には早く「障害だ」ということをわからせてあげたら良い。	No	見たらわかる障害は早期の受容がしやすい。しかし発達障害は外見からはわかりにくい。受容しても、支援の方向が具体的になるだけで、治るわけではない。
9 保護者が障害の受容をいないと、支援がしにくい。	No	同上
10 偏食は親等が頑張って食べさせるように努力すると、そのうち好きになってくる。	No	無理させても嫌がるだけ。発達障害児には嗅覚・味覚が特定のものに対して鋭敏なことが多い。

- ・ 続いて、発達障害児の指導に携わっている学校法人こいみどり学園の谷口理事より「各種障害に関する概括的理解促進のための説明図」を資料にレクチャーが行われ

た（図5参照）。

- ・被災時の問題点をこの図から読み取るならば、まずは世間一般の人々からは精神障害や発達障害のような「見えない（身体的障害ではない）障害者」が相当多数存在することである。この障害者たちは、避難所へ行っても障害であることゆえの配慮を受けられない恐れがある（避難所のリーダーたちがこの種の障害に無知・無関心であった場合、その恐れがある）。その場合、避難所での扱いによっては症状（状態）が悪化する場合もあり得る。
- ・また、精神障害者や発達障害者の中には、「手帳を交付されるレベルの障害でありながら、障害の診断を受けようとしない」者も存在する。こうした人々は、行政からも障害者として認知されていないことから、被災時に障害の状況に対応した必要な配慮を受けられない恐れがある。
- ・さらに留意しておくべきことは、「障害と診断されるレベルにまでは達していないが、障害状態に準じた状態・傾向にある、しかも無自覚な人々」の存在である。こうした“グレーゾーン”というべき存在の方々にも、避難所生活の中で状態を悪化させるケースがある。
- ・これらのレクチャーは、参加者に対して大きな学びとなったようである。

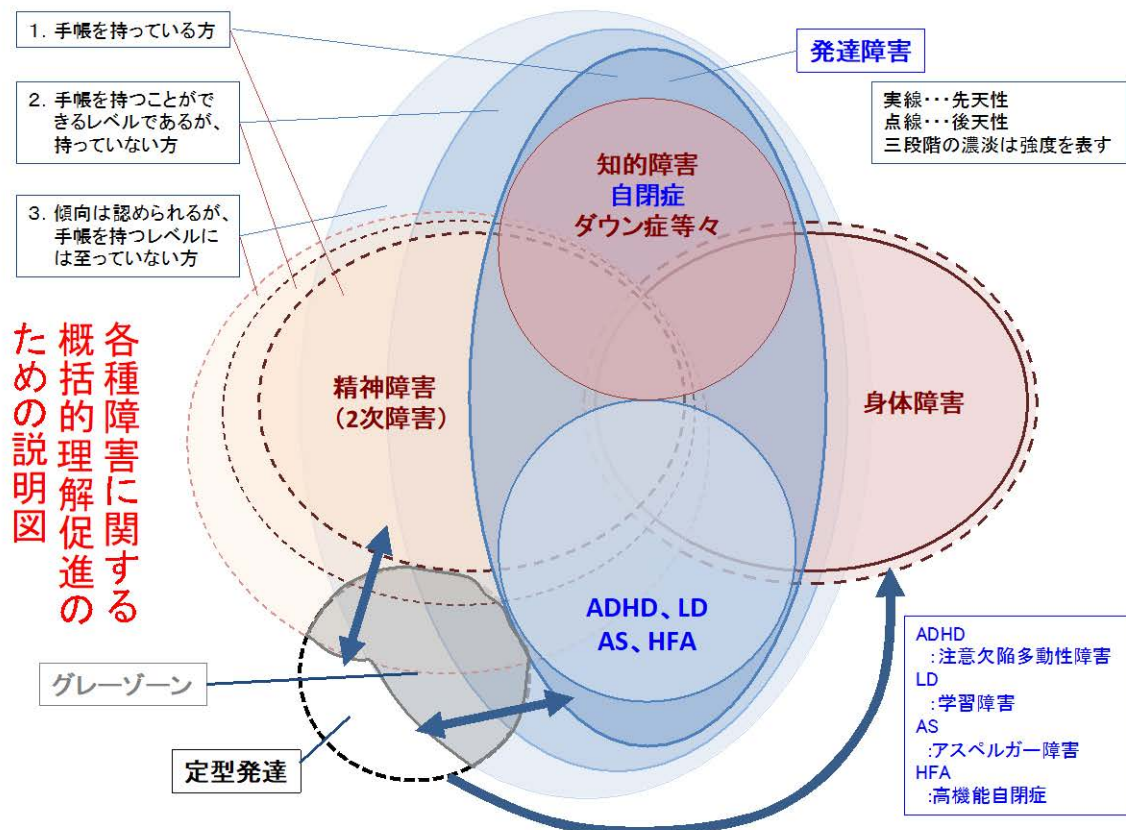


図5：各種障害に関する概括的理解促進のための説明図

（学校法人こいみどり学園専務理事 谷口祐司作）

②大阪市（社協職員、行政職員、民生委員等対象）

a) 対象コミュニティ

- ・主として大阪市内をはじめとする関西圏から集まった社会福祉協議会職員及び行政職員、並びに民生委員等。

b) 実施の経緯とLODE実施の狙い

- ・当PJ研究メンバーで社会福祉士の藤本の調整により、大阪市ボランティア・市民活動センターの記念行事における「分科会」の場で、育成LODEの研修会を実施できることとなった。
- ・この育成LODEは、①で報告した鈴鹿市の育成LODE（災害ボランティアが主な対象）とは異なり、社会福祉協議会のコミュニティワーカーや、行政の市民向け防災担当を主な対象とした。
- ・社協職員等の場合、一般的な自治リーダーや災害ボランティアより要援護者に対する意識や知識が高いと思われることから、地図上に要援護者シールを貼る作業よりも、「どのようなポイントに留意・注意して地域防災・福祉活動を展開していけば良いか」に関する視点や目標、手段を一体化して整理できる『曼荼羅チャート（経営コンサルタントが使用する名称であるが、ここではLODEを推進・普及するために用いるので、今後はLODE STARチャートという）』の可能性を探ることが主な目的の研修会とした。

地区や目的に合わせた図面使用	作業班内における会話促進の工夫をする	要援護者への認識を深めるための学習をする	地域の在宅要介護高齢者情報を収集する	地域の介護予備軍高齢者の情報を収集する	高齢者が避難できる場所の調査・計画を行う	普及者候補にはLODEを他者に伝えてもらう	社協職員はコーディネータ役となる	自分たちでWSの企画と運営を行う
個人情報の管理に留意する	図面WS	コミュニティ力を養うためWSの定例化を図る	地域の在宅要支援高齢者情報を収集する	○	要援護高齢者の自主的申告を促す	説明・説得・行動力のある人材を見つける	育成	講師・ファシリテータ役をしてもらう
凡例は状況に応じて工夫する	要援護者・支援者情報収集	基本単位は単位自治会で行う	基本コミュニティ単位でLODE WSを行う	高齢者への認識・理解を深める学習をする	高齢者参加によるWSや避難訓練を行う	導入LODE予備LODE講習会から始める	普及者育成支援ツールを活用する	人材育成の核となる関係機関参画体制を作る
言葉だけでなく視覚からの伝達を心がける	子ども自身が住所や電話番号を言える	子ども会や学校単位でWSを行う	図面WS	○	育成	避難訓練の定例化を図る	歴史や被災経験から学ぶ	要援護者らの抱える困難を認識・理解させる
WSは体験・共同作業重視で行う	L	大人が子どものことを知るための努力をする	L	コミュニティの紡ぎ直し	E	必要物資を考える・準備する	E	避難行動時のリスクや困難を想像させる
WS班作業は小地区や通学路単位で行う	親や地域の大人を引き込む	様々な子どもが一同に参加する	繋ぎ協働	D	体験	私設避難所のニーズと候補を考える	エトランゼへの対応を考える	避難所生活のリスクや困難を想像させる
世代をつなぐ(大人と子ども)	WSや訓練の場で参加者同士をつなぐ	井戸端サロン型活動をつなぐ	障害者・家族の自主的申告を促す	地域の重度障害者情報を収集する	障害者が避難できる場所の調査・計画を行う	他の世代や外国人との交流を体験してもらう	逃げること(緊急避難行動)を体験してもらう	避難所生活の模擬体験をしてもらう
エリアをつなぐ(小学校区で)	繋ぎ協働	物資備蓄や私設避難所づくりをとおしてつなぐ	地域の在宅身障者情報を収集する	D	障害者参加によるWSや避難訓練を行う	みんなの前で発言する体験をしてもらう	体験	炊出し体験(作る、食べる)をしてもらう
つなぎの軸・核となる体制を作る	要援護者と地域住民をつなぐ	地域の事業者と住民をつなぐ	障害者への認識・理解を深める学習をする	地域の知・精・発各障害者情報を収集する	家族の理解を得られる進め方を工夫する	防災機器等の操作・使用体験をしてもらう	防災グッズなどの共同制作体験をしてもらう	まち歩きによる共同確認作業体験をしてもらう

図6：平成27年度報告書でも提案した普及者育成支援ツール
 『LODE STARチャート』

c) 実際の実施内容と実施体制

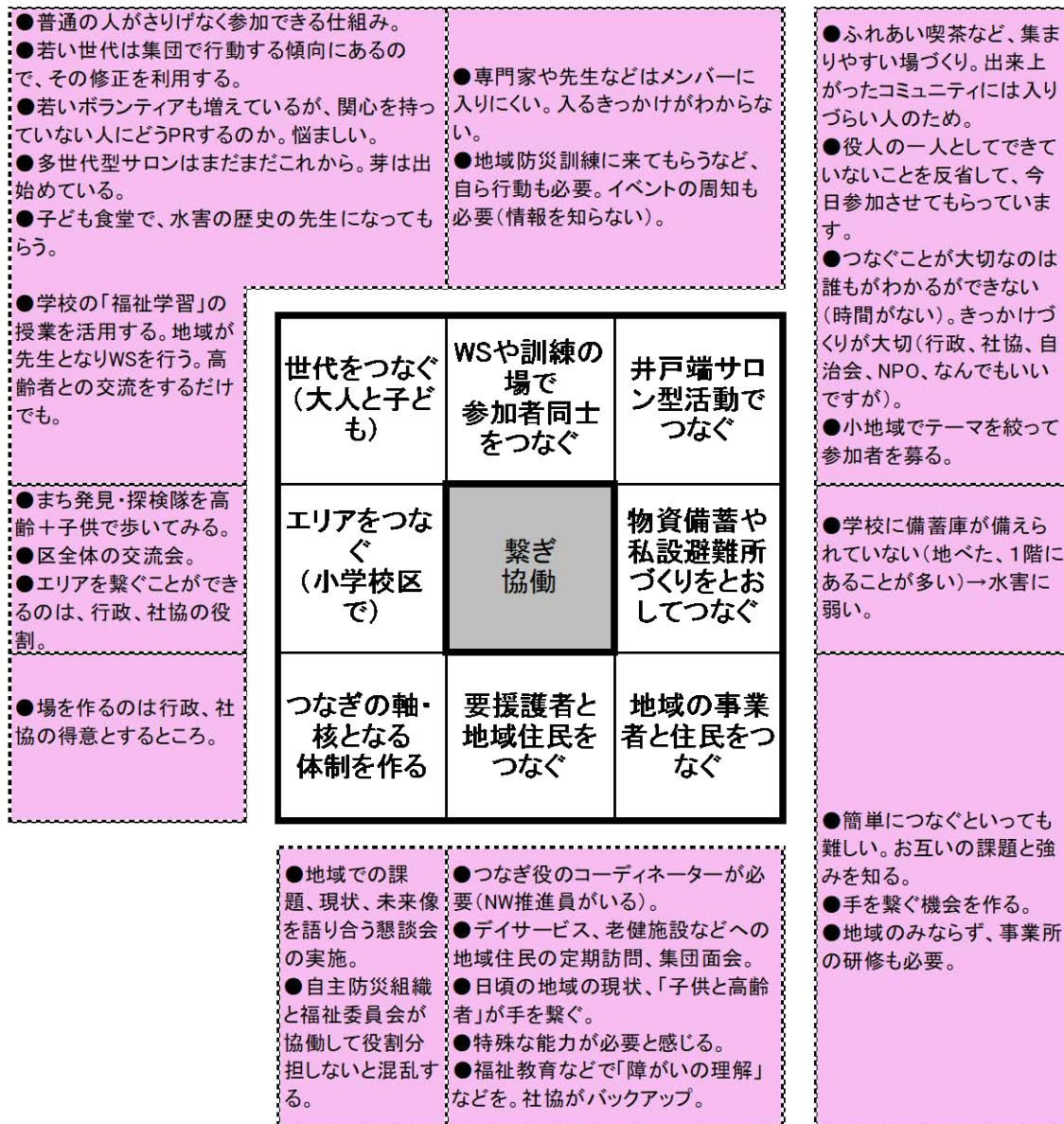
- 日時：2月26日 10時～12時30分
- 場所：大阪府看護会館（ナーシングアート）
- 参加者数と参加者層：40名
- 実施内容
 - ・ 41頁及び42頁の表19・20に示すが、今回は地図やマンション図への要援護者シール貼り作業がメインではなく、「LODE STARチャートの内容を深めるための、ワールドカフェ方式によるワークショップ」となった。
 - ・ ワールドカフェ方式に関する説明は省くが、今回は次のように進めた。
 - ・ テーブルをLODE STARチャートの中目標別に設置する。
 - ・ 各テーブルに「中目標」と「小目標」を印刷した大判の模造紙を置く（図7参照）。
 - ・ ワールドカフェワークショップの各テーブルでは、参加者がその模造紙の上に、中目標や小目標の内容等に対する意見や課題を記したポストイットを貼っていく。
 - ・ 最終的に、その模造紙上に蓄積された意見（ポストイット）の内容を、貼られた1のままエクセルファイル上で整理して、意見の傾向を分析する。
 - ・ 各テーマ別のテーブルには、各テーマに明るい専門家が1～2名ずつテーブルマスターとして配置につき、2巡して蓄積されるテーブルでの意見（ポストイット）をまとめる役割を担ってもらう。
- 結果
 - ・ 時間の都合上、今回は2巡しかカフェを回すことができなかったが、場を観察する限り、参加者の発言は活発であった。
 - ・ 2巡合わせた意見の集約結果（一部）を、図8及び図9に示すが、約30名の外部参加者（テーブルマスター以外の参加者）の大半が、この集約結果のメールによるデータ送付を希望したことからも、この実験的なワークショップに対する参加者の関心は低いものではなかったといえる。

障害者・家族の自主的申告を促す	地域の重度障害者情報を収集する	障害者が避難できる場所の調査・計画を行う
地域の在宅身障者情報を収集する	D 障害者	障害者参加によるWSや避難訓練を行う
障害者への認識・理解を深める学習をする	地域の知・精・発各障害者情報を収集する	家族の理解を得られる進め方を工夫する

図7：ワールドカフェ式ワークショップのテーブルに配置された模造紙の例
 （「障害者」をテーマにしたテーブルに設置されたものである。当日は、このような模造紙が計8枚設置された。）

●申告を促すには信頼関係が必要 ●障害者施設などの支援者が無知すぎる。抱え込んでしまう。 ●相談支援事業所が、近所づきあいまで含めた支援計画を作って調整すべき。 ●申告したくない人や、認めたくない人にはどうすれば良いのか？	●自助グループを作ってみる。 ●避難行動要支援者名簿の活用と整理。 ●地域内施設職員同士の交流会を図る。	●バリアフリーなど、そもそもの整備をする。 ●個々の障害の特性を踏まえた避難場所の設置 ●校区内の学校に受け入れを頼んでみる ●避難路も調査・計画する。									
●近所の住民が何をしているかがわかる場所をつくる。	<table> <tr> <td>障害者・家族の自主的申告を促す</td><td>地域の重度障害者情報を収集する</td><td>障害者が避難できる場所の調査・計画を行う</td></tr> <tr> <td>地域の在宅身障者情報を収集する</td><td>D 障害者</td><td>障害者参加によるWSや避難訓練を行う</td></tr> <tr> <td>障害者への認識・理解を深める学習をする</td><td>地域の知・精・発各障害者情報を収集する</td><td>家族の理解を得られる進め方を工夫する</td></tr> </table>	障害者・家族の自主的申告を促す	地域の重度障害者情報を収集する	障害者が避難できる場所の調査・計画を行う	地域の在宅身障者情報を収集する	D 障害者	障害者参加によるWSや避難訓練を行う	障害者への認識・理解を深める学習をする	地域の知・精・発各障害者情報を収集する	家族の理解を得られる進め方を工夫する	●地域の防災訓練は障がい者が参加できる内容になっていない。 ●障がい者と事業所が一緒に参加してほしい。 ●地域の方、当事者以外の人の参加がのぞまれる。 ※知られたくない人をどうするのか。個人情報への壁。 ※収集するより知るがいいかな ※日頃からのコミュニケーション ※隣に住んでる人が「あれ？」と思ったら声をかけること。顔なじみになるからスタート。 ※「情報を収集する」というのは「収集される側」からすると怖いですねえ。 ※何のためなのか、ミッションを最初に明らかにして、そこから広げていけば不審さは拭えるかも。 ※障がいを持つ人が、しんどい人が、みんな楽しく集える場を、時を、マンション内でつくっていくこと。
障害者・家族の自主的申告を促す	地域の重度障害者情報を収集する	障害者が避難できる場所の調査・計画を行う									
地域の在宅身障者情報を収集する	D 障害者	障害者参加によるWSや避難訓練を行う									
障害者への認識・理解を深める学習をする	地域の知・精・発各障害者情報を収集する	家族の理解を得られる進め方を工夫する									
●地域で勉強会を取り入れる（現状はほとんどない） ●どう住民を巻き込むか ●障がい者を社会的にあまり認めていない人は、どう引き込めば良いのか。 ●障がい者の方も参加できる災害の講座を開催する。 ●文化祭などに障がい者の方に参加してもらい知ってもらう。		●当事者家族の交流会などで、地域も一緒につながる機会を持つ。 ●まず自分の身を守らなければならないので、助けられないことも知ってもらう。									

図8：ワールドカフェ式ワークショップのテーブルの模造紙上に残された意見の整理・集約事例
 （「障害者」をテーマにしたテーブルに設置されたものである。当日は、このような模造紙が計8枚設置された。）



- 縦割りでなく、横串を刺せる人材の発掘。
- どうしても自分の周りのこと(県、職場、居住地)しかわからないので、今日のようなイベントはありがたい。
- 防災訓練等をゲーム化する。祭りの炊き出しがそのまま防災訓練に。
- 避難所重視の視点を変えてみる(収容不能者、行ききれない人、行かない人のため)。
- 各々のコミュニティの代表者が防災に関わらず、様々なイベントを企画してみる。→日常的な人の繋がりや顔が見えてくる。
- 地域代表の交代(女性の登用→地域における情報量が多い)
- 防災研修を受けた地域人は、防災の指導者として活躍する。
- 研修時の防災資料等はなるべく大きく、壁掛け式。
- 行政は協働と言うが、行政内では協働しない。
- 行政の協働は、他人に押し付ける為の方便になっている。
- 個人情報の取り扱い(課題)。行政や専門職以上に住民(地域リーダーそう)は過剰反応する(怖がる)。

図9：ワールドカフェ式ワークショップのテーブルの模造紙上に残された意見の整理・集約事例その2

(「繋ぎ・協働」をテーマにしたテーブルに設置されたものである。8つのテーマのうち、このテーマに一番多くの意見が寄せられた。)

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

表 19：大阪市での育成LODEの実施手順（その1）

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
実施順序	1	2	3	4	5	6	7	8
所要時間	5	3	8	8	3	3	20	15
時刻	10:00～10:05	10:05～10:08	10:08～10:16	10:16～10:24	10:24～10:27	10:27～10:30	10:30～10:50	10:50～11:05
実際時刻	10:07～10:12	10:12～10:16	10:16～10:25	10:25～10:31	10:31～10:38	10:38～	10:45～11:02	11:02～11:23
カテ	開始・導入		ウォーミングアップ			仮想マンションタイプの図上ワークショップ		
タイトル	挨拶 LODEとは 育成LODEとは	プロジェクトメンバー 紹介 参加者紹介	作業：「避難所マ ーク」わかりますか？	作業：あなたにとって 「自助」とは？	プレゼン：「高齢者三 種の神器」他	プレゼン：仮想マン ションLODE図上WS作業 手順	作業：要援護者の所在 を凡例シールによって 示す作業の体験	作業：「図上避難シ ミュレーション」と 発表
達成すべ き目標	・LODEが重視する「要 援護者の情報と支援」 の重要性を理解してもら う。 ・首及若育成LODEの意 義を理解してもらう。	プロジェクトメンバ ーや参加者を知り、作業 へのウォーミングアップ を行う	避難の基本として、参 加者にまず「避難所 マーク」を思い出しながら 書いてもらう。その結 果を全体で整理し、全 員で共有する。その結 果を全体で整理し、全 員で共有する。その結 果を全体で整理し、全 員で共有する。	参加者にまず「自助と は」を考えてもらう。そ の結果を全体で整理し 、全員で共有する。	自助の考え方の一例を 学んでもらう。要援護 者の生命の危険やQOL 低下につながるりか ねない事態の一例を 学ぶ。	仮想マンション図を用 いた育成LODEワーク ショップの手順に関し て理解を促す。	仮想コミュニティでの 学習で、参加者各自に 「自分の近所にいるか もしれない要援護者」 を認識してもらう。	避難シミュレーションを 通して、要援護者への 支援・配慮（要援護者 のタイプによって求め られる支援・配慮）の あり方を認識してもらう。
生成物	・要援護者対応を重視し たLODEに対する参加者 の初期的理解	作業しやすい雰囲気	参加者たちの「避難所 マーク」の理解の現状を 記したポストイット	参加者たちの「自助」意 識の現状を記したポスト イット	要援護者支援の考え方 に関する参加者性の理 解・認識	仮想マンション図を用 いたLODEワークショップ の基本的手順に関する参 加者の理解	参加者の要援護者情報 表示・整理方法の習熟 （立面戸割図）	避難シミュレーションを 通して得られる、要援 護者のタイプによって 求められる支援・配慮 のあり方に対する参加 者の認識
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	テーブル別グループ （1～6班）	テーブル別グループ （1～6班）
進め方	プレゼン	プレゼン	ポストイット作業 「避難所マークを覚え ていますか。思い出さ ながら書いて下さい。」	ポストイット作業 「自助と聞いてあなた は何を想起するか」を	プレゼン	プレゼン	作業：与えられた要援 護者情報をもとに、凡 例に従って要援護者 シールを貼っていく	作業：地震発生、そ の後の火災及び津波発 生の発生発表の下、 図上で各自行動及び 班単位での役割分担 シミュレーションを 行う。
		LODEプロジェクトメン バーを紹介する ②代表者倉原先生 ③幹事代表南郷さん ④研究メンバー：橋、 大西、森本、藤本、山 本 ⑤協力メンバー：伊丹 社協小林・松下、 ⑥ゲスト協力者 ・S学院大O教授、 ・T少年消防クラブK 代表、 ・映像プロデューサー H氏 ・K学校法人T事務理 事ほか	1. 南郷美智代から次の ような作業指示 ①「避難所マークを覚 えていますか。思い出さ ながら書いて下さい。」 の指示に対し、 3分以内にポストイッ トに書く。 ②ポストイットを回収 員に渡す	1. 南郷美智代から次の ような作業指示 ①「自助と聞いてあな たは何を想起するか」 を3分以内にポスト イットに書く。 ②ポストイットを回収 員に渡す	橋から、「高齢者三種 の神器」の考え方 は、 高齢者の身体障害化 （視力、聴力）、認 知症状悪化（記憶不 足による）を防ぐも のとして意味を持つ ことに言及。	橋から、 ①図上作業手順につ いて説明する。 ②要援護者等の凡例 を説明する。 ③仮想コミュニティ の要援護者情報を知 らせる（各班情報記 入済み図面配布）	①自宅・金の★ ②乳幼児・オレンジ丸 ③未就学児・黄色丸 ④小学生・水色丸 ⑤中高生・青色丸 ⑥前期高齢者・紫丸 ⑦後期高齢者・赤丸 ⑧身体的支援が必要 ：青ハート ⑨コミュニケーション 支援が必要・赤ハート 時間が不足するこ とが判明したため、 ①、⑦、⑧、⑨だけ 貼ってもらうこと にした。	①コーディネーター から発表時の与件を 発表する（日時、地 震規模、天候、火災 や津波の発生など） ②それに対してグル ープ単位で、各自 の行動やグループで の役割分担を踏まえ て避難行動を検討す る。
		南郷よりLODEのDをV に置き換えるとLOVE （臨入愛）であるとい うことを理解してほ しいというお願い。 い。	2. 回収されたポスト イットを倉原、森本に よってホワイトボード 上に分類、整理。全体 に傾向を報告。	2. 回収されたポスト イットを倉原、谷口に よってホワイトボード 上に分類、整理。全体 に傾向を報告。				③班別にリーダーから 作業結果を報告して もらう
役割	●プレゼンター：橋	●プレゼンター：橋 ●プレゼンター：南 郷	●プレゼンター：南郷 ●補助者：森本 ●補助者：倉原	●プレゼンター：南郷 ●補助者：倉原 ●補助者：谷口	●プレゼンター：南郷	●プレゼンター：橋	●全体コーディネ ーター：南郷 ●補助者：橋 ●テーブルファシリ テーター 各班1名以上	●全体コーディネ ーター：南郷 ●補助者：橋 ●テーブルファシリ テーター 各班1名以上
観察	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール	●LODEロゴ拡大印刷模 造紙 ●LODEの種別一覧表		●ポストイット大、ボ ールペン、模造紙	●ポストイット大、ボ ールペン、模造紙	●高齢者三種の神器入 れ実物	●凡例表シート（各模 班に複数枚） ●仮想コミュニティの 要援護者情報（コー ディネーター手許用 戸割図）	●仮想マンション立 面戸割図（6班分） ●凡例シール各種 ●凡例表シート（各 模班に複数枚）	●作業7を終えた仮想 マンション立面戸割 図（6班分） ●マジックペンセット
場所	大阪府看護会館（ナースングアート）							

社会技術研究開発「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成28年度 「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」
研究開発プロジェクト年次報告書

表 20：大阪市での育成LODEの実実施手順（その2）

順番	時刻	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15
実際順序	休憩	9	19	11	12		13	
所要時間	10	15	10	10	20	5	10	5
時刻		11:15～11:30	11:30～11:40	11:40～11:50	11:50～12:10	12:10～12:15	12:15～12:25	12:25～12:30
実際時刻		11:29～11:44	11:44～11:52	11:52～12:07	12:07～12:27	時間切れにより省略	12:27～12:42	時間切れにより省略
カテゴリ		ワールドカフェ方式 豊楽羅チャート 企画ワークショップ				結び		
タイトル		LODESTARチャート （豊楽羅チャート） についての解説	ワールドカフェ 第1巡回	ワールドカフェ 第2巡回 及びまとめ作業	ワールドカフェ結果の 班別による全体発表	本日の評価と課題	まとめと講評	アンケート
達成すべき目標		当グループが考案した『LODESTARチャート』の企画ワークショップに取り組んでもらうために、チャートの基本構成や使い方をイメージ、さらにはワールドカフェワークショップスタイルについて説明し、理解してもらう。	『LODESTARチャート』を構成する8つの目標・視点である「子ども」、「高齢者」、「障害者」、「避難者」、「体験」、「育成」、「つなぎ」、「図面」というテーマ別に、小目標のアイディアや課題を検討し、『LODESTARチャート』をより使いやすいものとする。	『LODESTARチャート』を構成する8つの目標・視点である「子ども」、「高齢者」、「障害者」、「避難者」、「体験」、「育成」、「つなぎ」、「図面」というテーマ別に、小目標のアイディアや課題を検討し、『LODESTARチャート』をより使いやすいものとする。	『LODESTARチャート』構成要素（中目標、小目標）に関するアイディアや課題の検討結果をまとめて発表することで、参加者の『LODESTARチャート』に対する意識・認識の向上を図る。	本日の評価と課題について、ホストイットにより、参加者の声を拾う。	参加者に、講師による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう。	今回参画への感謝と今後の継続的参加を依頼するとともに、本日の評価・課題指摘の簡易なアンケート調査を行う。
生成物		『LODESTARチャート』の企画ワークショップに取り組んでもらうための参加者の基本的理解。	『LODESTARチャート』に対する参加者の認識や意見（8枚のワークショップ図面に残る）。			参加者の本日成果と課題の共有	参加者の次回への意識	今後の参加への意欲とアンケート結果
作業単位		全体	テーブル別グループ （1～6班）	テーブル別グループ （1～6班）	テーブル別グループ （1～6班）	全体	全体	全体
進め方		プレゼン コーディネーターから『LODESTARチャート』の基本構成やその内容、意味に関して、概説を行う。	ワールドカフェ第1巡回 1. 異なる中目標別にテーブルを設置する。 ●子ども班 ●高齢者班 ●障害者班 ●避難者班 ●体験・図面班 ●育成・つなぎ班 2. 参加者はあらかじめ指定されたテーブルで、中目標や課題について、自由な意見をホストイットに記し、それを指定模造紙に貼る。	ワールドカフェ第2巡回 1. テーブルマスターだけが居残り、他の参加者は自分の行きたいテーマ（中目標）のテーブルに移動する。 ●子ども班 ●高齢者班 ●障害者班 ●避難者班 ●体験・図面班 ●育成・つなぎ班 2. 参加者はあらかじめ指定されたテーブルで、中目標や課題について、自由な意見をホストイットに記し、それを指定模造紙に貼る。	全体発表・班別検討結果 各班の全体向け発表を行う（3分×6班）	ホストイット作業： 「本日の良かったところと反省点」について ホストイットに意見を述べてもらい提出してもらう。	プレゼン プロジェクトリーダー、プロジェクト協力者の2先生から簡単な講評を発表してもらう 南部は、伊勢の伝統的防災行事『郷中施』にみる継続の大切さと、『乳幼児アタッチメント利用による防災都市』にみる障害者への眼差しについて話した。	プレゼン 南部美智代からお礼とアンケートのお願い。 協力者に「高齢者三種の神器入れ」のプレゼン 会場の都合上アンケートが難しかったので、「ワールドカフェ結果集約資料を希望する人」に名刺を提出してもらうよう伝えと、社協側からの出席者30名のうち25名がこの資料を希望した。
役割		●プレゼンター：橋	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・O教授（子ども）、山本（高齢者）、I専務理事（障害）、藤本（避難）、K代表（育成、つなぎ）、松下（体験、図面）	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・O教授（子ども）、山本（高齢者）、I専務理事（障害）、藤本（避難）、K代表（育成、つなぎ）、松下（体験、図面）	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・O教授（子ども）、山本（高齢者）、I専務理事（障害）、藤本（避難）、K代表（育成、つなぎ）、松下（体験、図面）	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・O教授（子ども）、山本（高齢者）、I専務理事（障害）、藤本（避難）、K代表（育成、つなぎ）、松下（体験、図面）	●講師者：南部 ●講師者：菅原	●プレゼンター：南部
観察		倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友
記録		大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール		●LODESTARチャートのハフボ資料 ●上段を印刷したもの（1人1部ずつ配布）	●LODESTARチャートの中目標・小目標部分をA全判にモノクロ印刷したもの（各テーマ1枚ずつ） ●LODESTARチャートを印刷したもの（1人2部ずつ配布） ●意見書き込み用ホストイット ●ラッシャンペン	●LODESTARチャートの中目標・小目標部分をA全判にモノクロ印刷したもの（各テーマ1枚ずつ） →作業10で使用したものを引き続き使用する。 ●LODESTARチャートを印刷したもの（1人2部ずつ配布） ●意見書き込み用ホストイット ●ラッシャンペン	●LODESTARチャートの中目標・小目標部分をA全判にモノクロ印刷したもの（各テーマ1枚ずつ） →作業11で使用したものを引き続き使用する。	●ラッシャンペン ●ホストイット（2色）	●ホワイトボード ●乳幼児アタッチメント素材による防災頭巾	●アンケート用紙 ●高齢者三種の神器入れ（人数分）
場所		大阪府若託会館（ナースینگアート）						

3 - 3. 研究開発結果・成果

(LODEプログラムとしては確立されてきた)

本研究で開発を目指す手法としてのLODEワークショップについては、これまで2カ年半の研究活動の中で一定のプログラムの内容・スタイル、及びその効果がある程度確立されてきたといえる。

例えば、取組み当初よりしばらくの間はLODE推進のキーマンである南部によりほとんどのWSが進行されてきたが、現時点で既に、「地域で育ったキーマン」が、自分の力で「南部から教わったLODEワークショップ」を展開していたり、あるいはLODEワークショップの企画や調整に取り組んでいる。

自律した実践コミュニティがある程度育成できているという点（ある特定の特殊な地域に限らず、また研究メンバーがいなくても出来るという点）では、LODEによる効果が発揮されているものといえる。

同時に、これらの動きは、LODEワークショップは誰でもできるプログラムとして確立されつつあるがゆえといえることができる。そして、このプログラムの確立は普及という点への貢献が大きい。

(継続・持続が必要・有効であること、その為の方向、ポイント)

一方でこうしたLODEワークショップを市民社会・地域社会にとって、また本研究が目指す「自助（及び互助）による防災福祉」の点からみて真に有効なものにするためには、取り組みの持続・継続が必要・必須であることも確認出来た。

これは課題でもあり、同時にこうした課題を描き出したことも本研究の成果であろう。同時にこうした課題に対して、(2)で述べるように、今回の活動の中で幾つか方向やポイントも見出されている。

このことはまちづくりの現場では当然のことであるが、「自助（及び互助）による防災」分野でもその必要性が確認されたということである。

(LODEの内包する普及課題と重要性)

先に述べた「プログラムとしての確立」と「継続・持続の必要性・有効性」には、普及に際しての注意点も内包されている。すなわち「プログラムとしての確立」による普及が、誤った形式的WSの展開に向かい兼ねないという問題を孕むことである。普及できる一定の形が整ったことは有効だが、逆にその形だけに拘るがあまり柔軟性のない硬直化し安いものとして普及してはよくない（従来類似手法においても同様な形の普及はあった）。そのための意識・注意喚起として「継続・持続させるためには何が必要か」という問いが大事な示唆を与えてくれると思われる（一定の形にはまらずある程度地域独自色を出すなど柔軟に）。

これらは決して容易いことではないが、少なくともこのことを意識・認識しておくことは重要である。またそれは経験の中で培われるものであろうし、地域の現場にはそうした人材・環境も存在するものである。

次の(1)～(5)に、今年度の結果・成果を整理しておく。

(1) LODEワークショップの体系化

表21は、昨年度報告書において整理したLODEワークショップ体系化（案）である。

平成28年度は、さらに1カ年の取組みを経て、この体系化の案を、表22のようによりシンプルな案へと変更・再提案したい。

その理由は次のとおりである。

- ・「導入LODE」は、内容が特別なものではなく、基本LODEや育成LODEの内容を必要に応じてアレンジすることで足りる。
- ・「障害者LODE（本人や家族の参加）」は現時点ではその実現がまだ難しいと言わざるを得ない。障害者や家族が周囲の目を気にせず、むしろ周囲の理解の中で安心して防災ワークショップに参加できる、そのような環境が実現するまでにはまだ少々乗り越えなければならないハードルが残されている。当面は、基本LODEや育成LODEのメニューの中で、「障害に対して理解を深めるための学習」要素を強化することで対応すべきと考える。
- ・「つなぎLODE」は、基本LODEや育成LODEと比べ参加者の広がり異なるが、実施する内容が大きく異なるわけではない。したがってこれも基本LODEや育成LODEの内容を必要に応じてアレンジすることで足りる。
- ・普及を考えた時、メニューは多すぎない（複雑すぎない）ことがベターであると考えられる。よって、今年度報告書では、基本LODE、育成LODE、そして「子どもLODE」3つをLODEワークショップとして普及に向かうべきと提案する。

表21：平成27年度報告書で提案したLODEワークショップ体系化（案）

LODEのタイプ		対象・エリア	狙い
導入（予備）LODE		市区町村域、学校区、連合町内会	・LODEに取組む必要性、重要性をより多くの住民にアピールする。
基本LODE （今LODE及び5年後LODE）		単位町内会・自治会、及び班、マンシヨンの組合等	・住民一人一人の自助力を上げる。 ・共助意識醸成と要援護者情報共有。 ・将来の守り手育成意識の醸成。 ・防災訓練・避難訓練。
補完LODE	子どもLODE	学校区など	・子ども個人個人の自助力を上げる。 ・親（子育て世代）の関心を惹きつける。
	障害者LODE	全市・全町域、療育センター・障害者センター等の対象エリア	・障害者家族同士のネットワーク構築。 ・私設避難所設置能力養成。 ・一般住民への周知。
つなぎLODE		学校区	・学校区内の単位自治会や子ども会、PTA、さらには障害者施設などをつなぐ。 ・災害時に同じ避難所（学校など）を利用すると思われる住民同士がコミュニケーションを図る。
普及者育成LODE（地域版）		基本LODEと同じエリア	・地域の中でLODEファシリテーターを養成する。
普及者育成LODE（仮想版）		仮想コミュニティ図を用いるので参加者のエリアは不問	・地域を特定せず、広くLODEを普及・指導する人材を育成する。

表22：平成28年度報告で提案するLODEワークショップ体系化（案）

LODEのタイプ	対象・エリア	狙い
基本LODE (今LODE及び5年後LODE)	単位町内会・自治会、及び班、マンションの組合等	・住民一人一人の自助力を上げる。 ・共助意識醸成と要援護者情報共有。 ・将来の守り手育成意識の醸成。 ・防災訓練・避難訓練。
子どもLODE	学校区など	・子ども個人個人の自助力を上げる。 ・親（子育て世代）の関心を惹きつける。
育成LODE	基本LODEや子どもLODEと同じエリア	・地域の中でLODEファシリテーターを養成する。
	仮想コミュニティ図を用いるので参加者のエリアは不問	・地域を特定せず、広くLODEを普及・指導する人材を育成する。

（２）「継続・持続」から求められる基本LODE普及者のタイプ

当プロジェクトが当初からワークショップの実践に取り組んでいる伊丹市においては、既に何名かの「LODE普及者」が育っている。

コーディネーターとして裏方に徹し複数の地域でLODEワークショップを仕掛ける社協職員（コミュニティワーカー）の他、A学校区内で自治会対象のLODEや小学校での子どもLODEの講師役を担う民生委員たちや、同様にA学校区内のSマンション自治会で3カ年に渡って毎年LODEワークショップを企画・実施する自治会長N氏等が存在する。

3-3.の冒頭でも述べたように、A学校区の民生委員たちは、既に当プロジェクト（南部を中心とする事務局）の手を離れ、独自でLODEワークショップを展開し始めている。中でも中心人物であるF氏は、「南部のコピー」ともいうべき内容でワークショップの中心的ファシリテーターを務めている。しかし、その段階はまだ“1巡目”であり、仕掛けた現場の継続・持続という課題に直面する以前の状況であると思われる。

一方、Sマンション自治会長の場合は、毎年同じ「Sマンション自治会」という現場でLODEワークショップを開催している。そして、自治会の活動がマンネリ化・停滞しないようにと、毎年少しずつ内容をアレンジしながらLODEワークショップを企画・開催している。自らワークショップのファシリテーターとして参加者の目の前に立つ時間は決して多くはないが、それでも毎年少しずつワークショップの現場進行役を担う時間は長くなってきている。

F民生委員のやり方は、短期間でLODEを普及・展開させるためには重要な役割を担うが、一方でN自治会長のような「息の長い継続・成長ストーリーのある活動を生み出す」ための工夫・企画力も不可欠といえる。

F型とN型、この両方を併せ持つ進め方が重要といえる。

（３）子どもLODEの展開方向

27年度の子どものLODEワークショップは、いずれの現場でも長時間（3時間あるいはそれ以上）であった。

今年度は長時間現場が1箇所、短時間（1時間程度）の現場が2箇所であった。

短時間の現場のうち2回（伊丹市A小学校、広島市安佐北区F地区2回目）のワークショップについては、南部が不在であったこともあって、映像メニューやクイズメニューなどの新しいメニューを企画・準備して運営に臨んだが、それが功を奏する結果となった（子どもの観察や教員、子育て関係者の反応・評価からも読み取れた）。おそらくその成功は次のような理由によるものと考えられる。

- ・現代の子どもは、会話でコミュニケーションする能力が昔の子どもと比べて劣ってきていると思われるので、映像や画像を使うメニューの方が伝わりやすい。
- ・現代の子どもは、集中力や持久力が昔の子どもと比べて劣ってきていると思われるので、時間の短いメニューをたくさん用意し、目先の変化をつけてあげる方が伝わりやすい。
- ・現代の子どもは、昔の子どもと比べて自己肯定感が育っていないと思われるので、叱咤する指導法よりも、まずは褒めておだてる指導の方が伝わりやすい。

一方で、今年度南部がコーディネートした鳥羽市M地区の長時間現場が失敗したかということ、そうではない。短時間型の2箇所に劣らない成功（地区住民たちからの評価の声）モデルとして評価できるかもしれない。

そこには、「フィールドワーク」を取り入れたこと、ドローンの体験など目新しいメニューがあったこと、離島の子どもたちが「大人とのコミュニケーションに慣れている」ことなどの成功要因があげられる。そして何よりも、南部がこのタイプの指導経験が豊富であることが大きな要因であろう。

今後、子どもLODEワークショップは、学校、子ども会、子育て支援現場などを中心に展開を図ることとなるだろうが、短時間タイプと長時間タイプを適切に使い分けるバランス感覚が重要である。

（４）育成LODE

今年度、LODEワークショップは2箇所（鈴鹿市、大阪市）で実施した。

鈴鹿市の場合は、地元の災害ボランティアや民生委員などが対象であり、図上ワークショップ（地域の地図や仮想マンション図の利用）に加え、「障害者や子ども等に関する勉強会」に取組んだ。

一方、大阪市の場合は、広く関西圏から社協のコミュニティワーカーやボランティアセンター職員を対象とし、「LODESTARチャートの内容を深めるためのワークショップ」を中心に据えた（図上で要援護者を支援するワークショップはポイントを押さえる程度）。これは対象者が災害ボランティアよりは要援護者の状況に明るく理解があると考えられるからである。

今後も育成LODEワークショップは、これら2つのタイプで展開されるだろう。

（５）人材育成の状況

図10は、伊丹市A地区におけるLODE推進体制が平成27年から28年にかけて変化した様子を示した図である。

当初は、南部及び当プロジェクトが深く関与（指導、企画）していたが、現在ではほとんど現場だけで企画・実施が行われており、当プロジェクト側はそれを見守っているだけである。同じA地区のSマンションや、神戸市灘区大規模マンションでも、多少のスピード差や程度の差はあるが、同様の傾向をみせはじめている。

こうして現場が自律（自立）へと向かっているということは、「住民主体型が信条」であ

るLODEプログラムにおいては、評価できることととらえられる。

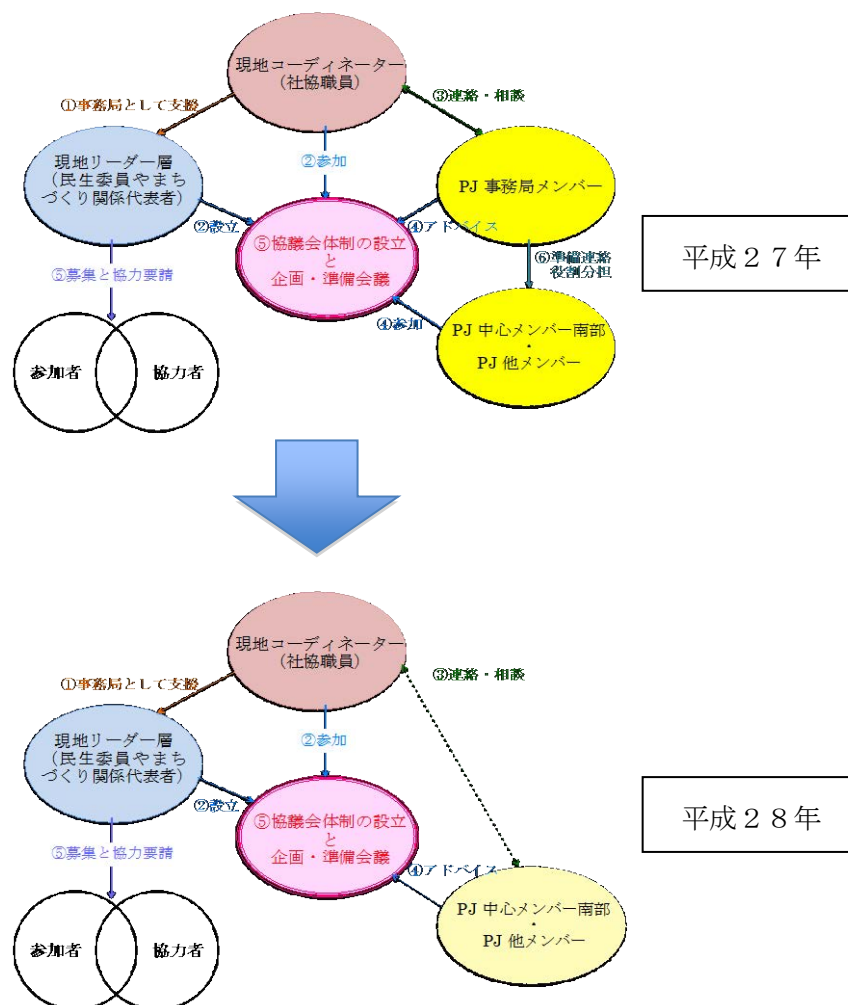


図10：伊丹市A地区におけるLODE推進体制の変化の状況（H27→H28）

3 - 4. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2016年5月18日	コアメンバーミーティング	名古屋市「まちの会 所」	前年度研究開発内容の再点検と今後の進め方について
2016年6月4日	プロジェクト研究会議	鈴鹿市ケーブルテレビ会議室	6月3日のワークショップ調査の反省会と、今後の進め方について
2016年8月6・7日	現場でのコアメンバーミーティング	鈴鹿市三重県消防学校	8月6日ワークショップ調査の反省会

2016年8月 21日	現場でのミー ティング	神戸市灘区摩 耶シーサイド プレイス	今後の進め方について
2016年9月 17日	現場での事前ミ ーティング及び 反省会	伊丹市A地区 K会館	9月17日ワークショップ調査の事 前打合わせ及び反省会
2016年10月 4～7日	協力者開拓のた めのミーティン グ	札幌市内各所	今後の普及に関するキーパーソン への説明や意見聴取
2016年10月 26日	現場での準備ミ ーティング	伊丹市社協	伊丹市社協担当者と今後の進め方 に関するミーティング
2016年10月 27日	現場での企画ミ ーティング	神戸市灘区摩 耶シーサイド プレイス	11月23日防災訓練及び1月14日震 災祈念イベントの企画
2016年11月 12日	プロジェクト研 究会議	鈴鹿市鈴鹿	11月13日ワークショップ調査の 直前準備会議
2016年11月 13日	プロジェクト研 究会議	鈴鹿市寺家	11月13日ワークショップ調査の 反省会
2016年12月 9日・10日	現場での事前準 備ミーティング 及び反省会	広島市基町	12月10日ワークショップ調査の 直前準備打合わせ及び事後反省会
2017年1月6 日	現場での事前企 画ミーティング	伊丹市A地区 Hセンター	1月12日ワークショップ調査に向 けた最終準備会議
2017年1月 14日	コアメンバーミ ーティング	神戸市灘区摩 耶	今後の摩耶の進め方に関する意見 交換
2017年1月 15日	現場での事前企 画ミーティング	鳥羽市M地区 コミセン	3月11日ワークショップ調査に向 けた事前企画
2017年1月 29日	コアメンバーミ ーティング	沖縄県金武町 がらまんじゃ く	2月26日ワークショップ調査及び 3月3日シンポジウムに関する打合 わせ
2017年2月 11日	コアメンバーミ ーティング	広島市基町	普及体制（LODEジャパン、 LODESTAR）づくりに関する打 合わせ
2017年2月 25日	プロジェクト研 究会議	大阪伊丹空港	2月26日ワークショップ調査の最 終事前打ち合わせ
2017年3月2 日	コアメンバーミ ーティング	東京溜池山王	3月3日福武ホールシンポジウムの 事前準備打合わせ
2017年3月 11日	プロジェクト研 究会議	鳥羽市M地区 M旅館	3月11日ワークショップ調査の反 省会
2017年3月 26日	コアメンバーミ ーティング	大阪府社会福 祉会館	今後の普及者育成支援ツールの改 善内容に関して

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

当プロジェクトは、「研究開発」と「実装」を同時に行っている印象を与えることが多いと思われる。事実、社会に対して実装力のある手法を開発していこうとする場合、机上論だけによる研究開発においては全く無力・無意味であり、当プロジェクトの取り組みが常に「実装」を意識したものであることは否定できない。

また当然であるが、実装の成否には無頓着でデータ収集のみを目的とする研究開発姿勢も問題が大きい。現場コミュニティの協力を得ながら進める調査では、研究開発成果とともに現場コミュニティにとってもメリットを与えるものでなくてはならないし、現場に対して誠意を欠く姿勢となってしまう。

よって、本プロジェクトにおける研究開発成果の活用・展開は、先ず調査対象モデルコミュニティにおける研究開発を実装レベルでもある程度成功に導き、成功・先導事例として研究開発記録・データとともに発表していくことが基本である。

全国各地の地域コミュニティから注目される成功・先導事例を持つ手法こそがその後の実装段階の展開で力を持つという考え方のもと、次のような展開を図っている。

4 - 1. 先進・先導モデルづくりと手法としての整理・位置づけ

- (1) 基本LODE、マンションLODEのモデル
 - ・ 兵庫県伊丹市A地区（小学校区として）
 - ・ 兵庫県伊丹市A地区Sマンション（マンションとして）
 - ・ 神戸市灘区Mマンション（マンションとして）
 - ・ 三重県鳥羽市M地区（郡部集落として）
- (2) 子どもLODEのモデル
 - ・ 兵庫県伊丹市A地区（小学校：短時間モデル）
 - ・ 広島市安佐北区子育て支援団体（小学生：短時間モデル）
 - ・ 三重県鳥羽市M地区（小・中学生：長時間モデル）
- (3) 災害ボランティアなど対象の育成LODEモデル
 - ・ 三重県鈴鹿市
 - ・ 大阪市西成区
- (4) 地域福祉人材対象の育成LODEモデル
 - ・ 大阪市社会福祉協議会大阪市ボランティア・市民活動センター

5. 研究開発実施体制

- (1) 岩手県立大学グループ
 - ①倉原宗孝（岩手県立大学総合政策学部、教授）
 - ②実施項目
 - ・ 『LODE各手法』の第二次試行調査（企画・監理・分析）と追加関連調査の実施（企画・監理・分析）
 - ・ 『LODE各手法』の第二次試行調査の総括分析と研究開発報告に向けた手法の修正検

討

(2) 特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿グループ

①南部美智代（特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿、理事長）

②実施項目

- ・ 『LODE各手法』の第二次試行調査（企画・実査）と追加関連調査の実施（企画・実査）
- ・ 『LODE各手法』の第二次試行調査の総括分析と研究開発報告に向けた手法の修正検討

6. 研究開発実施者

研究グループ名：岩手県立大学

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目	研究参加期間			
							開始		終了	
							年	月	年	月
○	倉原 宗孝	クラハラ ムネタカ	岩手県立大学	総合政策学部	教授	統括／全体にわたる調査・分析	26	10	29	9
	金野 万里	キンノ マリ	SAVE IWATE (もりおか復興支援センター)		事務局長 (センター長)	被災地及び県内の地域情報／ 調査対象の設定／調査	26	10	29	9
	福田 由美子	フクダ ユミコ	広島工業大学	建築工学科	教授	研究開発全体における分析・ア ドバイス	26	10	29	9
	中須 正	ナカス タダシ	チェラーロンコーン大 学(タイ)		博士研究員・ 兼任講師	各種災害情報の提供／調査／ 分析などの検証	26	10	29	9
	延藤 安弘	エンドウ ヤスヒロ	特定非営利活動法人 まちの縁側育くみ隊		代表理事	LODE方法論の構築	28	4	29	9
	野中 里菜	ノナカ リナ	岩手県庁	復興局生活再建課	主事	調査・分析補助／連絡・調整	26	10	29	9
	菊池 のどか	キクチ ノドカ	岩手県立大学	総合政策学部	学生	調査・分析補助／連絡・調整	28	4	29	9
	橋 宜孝	タチバナ ヨシタカ	みんなが龍馬塾		コーディネー ター	被災地調査実査及び分析	26	10	29	9

研究グループ名：特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目	研究参加期間			
							開始		終了	
							年	月	年	月
○	南部 美智代	ナンブ ミチヨ	特定非営利活動法人 災害ボランティアネット ワーク鈴鹿		理事長	グループ統括／LODE方法論の 構築／試行調査WSの実施 (講師)／試行調査(ヒアリング 等)の実査	26	10	29	9
	藤本 真由	フジモト マユ	生きる力を育む研究 会		共同代表幹事 社会福祉士	LODE試行調査の協力先との実 施調整／試行調査WSの実施 (補助講師)	26	10	29	9
*	橋 宜孝	タチバナ ヨシタカ	特定非営利活動法人 災害ボランティアネット ワーク鈴鹿	LODE研究・普及チーム	研究員	LODE方法論の構築／試行調 査WSの実施(講師)／試行調査 (ヒアリング等)の実査／試行調 査の記録	26	10	29	9
*	大西 千佳	オオニシ チカ	特定非営利活動法人 災害ボランティアネット ワーク鈴鹿	LODE研究・普及チーム	研究員	試行調査WSの実施(補助講師) ／試行調査(ヒアリング等)の実 査／試行調査の記録	26	10	29	9
	延藤 安弘	エンドウ ヤスヒロ	特定非営利活動法人 まちの縁側育くみ隊		代表理事	施行調査の観察調査・分析	28	4	29	9
	山本 進	ヤマモト ススム	社会福祉法人鹿追恵 愛会		理事	LODE試行調査WSの実施(講 師)	26	10	29	9
	倉原 宗孝	クラハラ ムネタカ	岩手県立大学	総合政策学部	教授	LODE方法論の構築／試行調 査(ヒアリング等)の実査分析	26	10	29	9
	森本 馨	モリモト カオル	神戸市立西山小学校		教諭	LODE試行調査WSの実施(補助 講師：子どもや発達障害の専 門)	26	10	29	9

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、DVD

- ・(タイトル、著者、発行者、発行年月等)

(2) ウェブサイト構築

- ・LODE JAPAN & LODESTAR 設立ホームページ、
URL : <https://lodestar-jp.jimdo.com>、立ち上げ年月 : 2017年3月)

(3) 学会(7-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・RISTEX 第4回公開シンポジウム、コミュニティレジリエンスを高める社会技術～防災・減災を目指す地域の「参画」と「我がこと意識」～、2016年3月3日、東京大学福武ホール

7-3. 論文発表

(1) 査読付き(____件)

- 国内誌(____件)

・
・

- 国際誌(____件)

・

(2) 査読なし(____件)

・
・

7-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演(国内会議____件、国際会議____件)

- ・
- ・
- (2) 口頭発表 (国内会議_____件、国際会議_____件)
- ・
- ・
- (3) ポスター発表 (国内会議_____件、国際会議_____件)
- ・
- ・

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

- (1) 新聞報道 (2件)
 - ・ 中日新聞 2016年6月8日地方版：6月3日に鈴鹿市内で開催したLODE研修会の様子の記事が掲載された。
 - ・ 毎日新聞 2017年2月12日全国版：熊本地震被災地に贈呈する『シェル難』に関する記事が掲載された。
- (2) 受賞 (_____件)
 - ・
 - ・
- (3) その他 (_____件)
 - ・

7-6. 知財出願

- (1) 国内出願 (_____件)
 - ・ “発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号”
 - ・・・
- (2) 海外出願 (_____件)
 - ・ “発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号”
 - ・・・